
錬金術士っ！

寒天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

錬金術士っ！

【Nコード】

N2257V

【作者名】

寒天

【あらすじ】

アーランド共和国、旧名アーランド王国。そこは機械と錬金術で大きく発展したアトリエの舞台。私、トトリは期待の新人錬金術士として活躍していた。そんな時に発表された辺境の小国アールズ王国との併合。五年後に予定されている併合に先んじて人材の派遣が決定した。うん、それは別にいいんだ。でもね？なんで派遣団のリストに私の名前があるの？！※これは原作とはちょっと違うトトリが体験するアールズ併合までの五年間の物語である。

トトリからメルルへ（前編）（前書き）

アールズに行くまでの話し。

トトリからメルルへ（前編）

錬金術士っ！

プロローグ『トトリからメルルへ（前編）』

錬金釜に適当に見繕った材料を突っ込む。材料が沈むのを確認した後、釜の脇に立て掛けてある杖を取りその先端を釜の中に突っ込んでかき混ぜる。ぐるぐる。ぐる。

それからしばらくの間、ぐるぐるとかき混ぜていると釜戸の中が発光し始めた。それを気にせず、さらに混ぜ続けると一瞬強く発光。どうやら完成したみたいだ。

えいっと当たり前のように釜戸へ手を突っ込んで中身を取り出す。取り出したのは先ほどの材料ではなくて緑色の液体が入ったガラスの容器。

依頼された中和剤だ。

布から食材まで何にでも使える万能アイテムのこの瓶を釜の中から計三つ取り出し品度を確認。うん、まあまあかな。でも依頼の品には十分だ。

壁に取り付けてある時計を見ると正午になっていた。

完成までには時間にして約五時間くらいか。最初の頃に比べると雲泥の差だなと昔を思い出して苦笑する。



私、トトウーリア・ヘルモルトは前世の記憶がある。要するに転生ってやつをしたらしい。思い出したのは物心が付くくらいだったかな。当時は突然降って湧いてきたような知らない記憶に言いようがない恐怖を感じて、しばらくの間は姉にぴったりと引っ付いて離れなかった。両親も私を一人にしないようにと出来る限り一緒にいてくれた。

そのおかげか半年もしない内に記憶の整理もつき、以前よりもちよっぴり大人のトトウーリアが生まれたわけだ。

しかし当然問題もあった。前世の自分についてはあまり思い出せないけど、どうやらこことは違う世界で暮らしていたようだ。異世界ってやつらしい。

と、それは大した問題ではないんだ。問題だったのは、どうやら私の前世の性別が男だったらしいこと。つまり私は少し男勝りな女の子になってしまったようだ。

そのことに対しての家族の反応だけど、お母さんは私に似たのだと嬉しそうに笑って、お父さんはそんなお母さんに苦笑しながらも優しく笑って気にしないよと言ってくれた。

お姉ちゃんとは言えば私にもう少し女の子らしくするようにと口を酸っぱくして言うようになったけど、記憶にあった涙目十上目遣いを試してみたらあっさり陥落した。後に聞いた話だと胸がきゅんとなっらしい。

…あれ？よく考えればその少し後からお姉ちゃんがやたらと私を猫可愛がりし始めたような気がするんだけど…

と、とにかく！それから楽しく異世界ライフ？を過ごしていたわ

けだけど、そんな日々はすぐに終わることになった。

冒険者のお母さんが予定の日を大幅に過ぎても帰ってこないのだ。冒険者とは分かり易く言えば戦う開拓者だ。未知の土地を開拓する仕事なので、当然未知の細菌や危険な魔物との戦闘だってある。

でも、お父さんが言うにはお母さんはその筋では有名な冒険者らしく、そんじょそらの魔物なんかに負けたりしないとのこと。実際、予定日を過ぎることはあっても帰ってきた時の姿は怪我なんて一つもなく、毎回毎回私たちにお土産を持ってくるくらいである。

だけどその時はあまりにも長かった。あの人がちよっとやそつとでどうにかなるはずがない。そう思っていたが一月が過ぎ二月が過ぎ、気がついたら半年。ここにきて周りの大人はお母さんは死亡したものだと思われようになった。村の人たちも私たち家族を何かと気にかけてくれるようになり、既にお母さんの死亡説は公認の事実として世間に広がっていたのだ。

私はお母さんが生きていると最後まで信じていたかった。でも、周りの大人たちは皆口を揃えて死亡説を私に言い聞かせた。私に前世の記憶があるなんて知らない彼らには、その時の私の姿が起きたことを理解できていない駄々っ子に見えたのだろう。事実見た目は十にも届かない子供だったのだから仕方がないとは思うけど。

問題は家族までもがお母さんの死亡説を受け入れたことだった。このことに関して私は声を上げて二人に反発した。二人とも私にどうにか分かってもらおうと必死に説明してくれたが、下手に前世の記憶を思い出したせいか、精神的にある程度成長していた私はそれを聞き入れずに二人の言葉を無視。しばらく我が家はどこかギスギスした雰囲気満ちることとなった。

少しして、お父さんは船職人の仕事を止めて細々とした大工仕事

を初めた。お姉ちゃんも本格的に家事を切り盛りするようになり、村の人たちの手を借りながらも忙しそうに日々を過ごしていた。私といえば以前の男勝りの性格は身を潜め、大人しい引っ込み思案な女の子になっていた。

コロナ先生と出会ったのはそんな時だった。
そして、これが今の私の始まりだったんだ。

先生は錬金術士と呼ばれる人だった。当時の私は家族間のギスギスした雰囲気にならず、前世の記憶にも無かったその未知なる技術に飛びついたのだ。ちょうど生徒の育成に息詰まっていたこともあって、先生はまだ幼かった私に教えるのも経験の一つだと思い、私に錬金術を教えることを了承してくれた。実際はその時の私の必死な雰囲気が少し心配だったのも理由の一つらしい。

その後先生はお父さんとお姉ちゃんにこの話を通して、しばらくの間村に滞在することになった。ちなみに、その時に一悶着あったのは語るまでもない。

先生との錬金術の勉強は穏やかに、時に緊張感を纏わせながらもゆったりと過ぎていった。私も昔の明るさを徐々に取り戻していき、先生という時間限定だが自然と笑顔を見せる回数が増えていった。

そんなある日の授業の時間、先生がいつものほんわかとした表情を真剣なものに変えて話しかけてきた。内容は家族のことについてだった。

いくら先生でもあまり話したくないことだったのでどうにか誤魔化そうとしたけど、先生は今までに見たことのない真剣な表情でそれを許してくれなかった。

私は観念して事情と共に私の思っていることを話した。そして気

がつけば実は聞き上手だった先生相手に、今まで誰にも言わなかったようなことまで熱心に話していた。先生はそれに相づちを打ちながら真剣に耳を傾けてくれた。

全てを聞き終えると先生は優しくもう一度自分の気持ちと向かい合ってみてと言って宿に帰っていった。

その日、私は一晩中自分の気持ちを考えた。私だって本当は分かっていたんだ。お母さんがどうなったのかなんて事は。ただ、幼い部分の私はその現実を拒否していた。前世の記憶があるからなんてかっこつけていても私は本当はただの幼い子供だったんだ。そして、不安だったんだ。だから反発した。お父さん達にとってお母さんがその程度の人だったなんて思いたくなくて。今思えば二人とも幼い私の為に、自分たちがしつかりしないといけないと必死だったんだろう。辛くないはずがなかったのだ。最愛の人を失ったのだから。本当は、私を不安にさせないよう無理をしていただけだったんだ。

次の日思い切って自分の気持ちを二人に打ち明けてみた。二人とも真剣に話を聞いてくれて全部話し終わった後に黙って私を抱きしめてくれた。お姉ちゃんなんか大泣きして、何度も分かってあげられなくてごめんねと繰り返すように謝っていた。

その日、私たちは以前と同じように家族の絆を取り戻したのだ。

ただ、お姉ちゃんが今まで以上に私を猫可愛がりし始めたのは仕方のないことだね。当然、そんなお姉ちゃんに当時求めていた母性を感じたせいか、私も凄く懐いた。ちなみに、それがお姉ちゃんのシスコン度合いを超加速させたのは言うまでもない。

それからコロナ先生の都合もあって錬金術の授業は半年ほどで終わることになったけど、私が予想以上に優秀な生徒であったためか

先生はほくほく顔でアーランドに帰って行った。

ちなみにいろいろとお世話になった先生のためにお別れ会を開いた時は子供のように号泣していた。何でも、私と離れたくないらしい。今までの教え子の中で一番教えがいがあるし、何よりも可愛いからだとか。なんだそれ。あなたは子供かと呆れてしまった。

ただ、今まで先生にどこか遠慮してた感じだったお姉ちゃんが物凄い勢いでそれに同意し、その日の中に先生との関係を友達までクラスアップさせていたのが未だに謎なんだけど。

ちなみにこの時既に先生にカリスマなんてものは微塵も無かった。錬金術以外は基本ドジっ娘で天然な人なのだ。それは家族仲が回復した後すぐに露見したことだが、どうやらそれまでの姿は幼い私にかっこいいところを見せたい一心で気を張りつめていた結果らしい。で、それが私たちの仲が直ったことで気が緩み地の性格が出てしまったとのこと。それから完全な今のドジっ娘先生になってしまったわけだ。私としては先生はどうなっても先生なので気にしないが、と言うよりも以前より親しみが持てるのでこっちの方が好き。

カリスマなんてものは先生には入りません。あの人もうすぐ三十路近いはずなのに無茶苦茶可愛い人だし。でも自分のことには鈍感なんだよね、私はそれが心配だよ。ステルクさんの気持ちにも全く気づく気配もないし。私としては応援してるんだけど、ステルクさんもステルクさんでこんな時だけ積極的に動かないし。いや、それも全部先生のスルースキルと鈍感スキルのせいで意味を成さないんだけどね。ステルクさん本人もあまり他人には知られたくないらしく、それがさらにチャンスに恵まれない環境を作る結果になっちゃってるけど。

と、話がそれちゃったね。今はコロナ先生の恋愛話ではなくて私

の話だった。

先生がアーランドに帰った後も私は錬金術の勉強を続けた。幸い材料は近場である程度は揃えられたので不自由はなかった。

それから数年、今からだと大体八年くらい前かな。友達のジーノ君に引きずられる形で冒険者になったんだ。

当然お父さんとお姉ちゃんは猛反対。加えて私の話した旅の目的が母の行方の確認だったせいか、お姉ちゃんとは久しぶりに大喧嘩になった。だけど、これだけはどうしても譲れなかった。未だ胸に残る幼い自分に決着をつけたかったから。姉妹喧嘩は一日続いたけど、結局お姉ちゃんが幾つか条件を付けて折れる形で終わりを迎えた。

ちなみに、お姉ちゃんはその後丸々一日私を抱きしめて離さなかった。私に嫌われたと思って不安だったらしい。正にシスコンの体現者、でも、私もそんなお姉ちゃんが大好きだから同じシスコンか。

私とジーノ君はまず冒険者の登録をするためにアーランドへ。無事登録を終えて晴れて冒険者として世に飛び出したのだった。

それから語るに長い大冒険があったんだけど、その話はまた今度。本当に、旅の途中ではいろんな出会いや出来事があった。旅の目的であるお母さんの行方にも辿り着けたしね。

楽しいこと、悲しいこと、たくさん経験して、今私は一人前の錬金術師としてここにいる。



懐かしい記憶の海から抜け出す。やってしまったと、再び時計を確認。良かった、さほど時間は経っていないようだ。急いで机に置いておいた依頼品の中和剤を手に取り鞆の中へ。後はこれをギルドに届ければ今日の仕事は終わりだ。鍊金釜の火を弱くして、戸締まりを確認。よし、完璧。扉を開けて外に出る。

綺麗な青空に生力に満ちあふれた人々の声、忙しそうに行き交う人々の姿。それを見ながらぐっと背を伸ばして深呼吸。

うん、今日もアーランドは元気一杯だ。

トトリからメルルへ（前編）（後書き）

この話のトトリは前世の記憶があるせいか、格好いい、凛々しいと思わせる部分があるように育った設定です。ちなみに前世の自分についての記憶は曖昧だったため、成長するにつれて気にならなくなりました。

私は私、トトリだよって感じで。

トトリからメルルへ（後編）（前書き）

今回でプロログは終わり。これから独自設定が入ってきますので
苦手な方はご注意ください。

トトリからメルルへ（後編）

錬金術士っ！

プロローグ『トトリからメルルへ（後編）』

依頼の品を納めるため冒険者ギルドにやってきたけど、何だか色々とごたごたしているようだ。それも仕方ないか、と目の前で忙しく動き回る人たちを見る。手には書類の束。大変忙しそうである。これは邪魔にならないうちに用事を済ませて帰った方がよさそうだ。

彼らの邪魔にならないよう注意しながら何時もの受付窓に足を進める。そこでは小柄な金髪の女性が忙しそうに書類に文字を書き込んでいた。

「こんにちは、クーデリアさん。依頼の品を収納に来ました」

「ん、トトリ？ あー依頼の品ね。そこに置いておいてくれる？」

クーデリアさんは私を一瞥し、それだけ言うとすぐに手元の書類に視線を戻す。あはは、今日は何時にも増して忙しそう。お邪魔したら悪いかなと思い、言われた通りに依頼の品を机の上に置いている。

一つ、二つ、三つと。これで今日のお仕事はお終いつ。

日が沈むにはまだ時間もあるし、久しぶりに体を動かしに（魔物退治）行こうかな。最近アトリエに籠もりきりだったから体が鈍っているかもしれないね。うん、そうしよう。そうと決まれば、すぐに出発だ。

と、気がついたら何やらクーデリアさんにガン見されていた。疲れているのか目が据わっている。正直怖い。

「え、な、何ですか？」

「そう言えばあんたも錬金術士だったわよね…しかもロロナの教え子、よね？」

「た、確かにロロナ先生は私の錬金術の先生ですけど…」

「…ふ、ふふふ、そう、そうよね？なら先生の尻拭いも当然の仕事よね？」

クーデリアさんが妖しく笑いだした時点で言いようもない悪寒を感じただけど、私が行動に出るより早くクーデリアさんは受付窓から身を乗り出して私の手を掴んだ。

え、私これでもかなりの実力者なんですが…

「逃がさないわよ、私たちだけロロナに振り回されるなんてフェアじゃないでしょ？」

前髪で目元を隠して、地獄の底から響いてくるような怨みのこもった声を吐き出すクーデリアさん。

恐っ、下手な魔物より余程恐い。

「いいわよね？ト、ト、リィ」

うえええん、いったい今度は何したんですか先生ー?!

◆
クーデリアさんの話は今一部で話題となっているアールズ王国との併合についてから始まった。ちなみに、この話は既に知り合いから聞いていたのですんなりと聞き入る事が出来た。ギルドの様子に納得がいった理由もこれがあった為である。

この話はアールランド国主ルードヴィック・ジオバンニ・アールランド、つまりジオ様の提案から始まったらしい。実はジオ様、件のアールズ王国国王とは旧知の仲で、そのために今回アールズ王国の共和国参加を提案しているのだそう。

当然これについては上で意見が真っ二つに分かれて、つい最近まで激しい論議が行われていたそう。

その結果、反対派の主な批判理由であるアールズ王国の現状についてを解決する為にも、アールズの国力増加について、国をあげて開拓事業を開始することになったとのこと。

そして、まずはアールランドから有能な人材の派遣が決定したみたい。

で、この話のどこにコロナ先生が関係してくるかと言えば、なんと今回の人材派遣に錬金術士として先生が選ばれたらしいのだ。

国が行う一大プロジェクトの一員に推薦されるなんて、やっぱり凄いよコロナ先生は。でも、それも先生の実力を考えれば納得できるかな。あの人はドジっ娘で天然ボケな人だけど、確かに錬金術士

としては破格の才能を持っているし。普段は全然そんな風には見えないけれども。

あれ？でも、先生はそんな事一言も言ってなかったような……うーん、あの人のことだからこんな話は私のところへ真っ先に話しに来るだろうし。

…もしかして先生の身に何かあった、とか？少し不安になる。

「あの、ロロナ先生は今どこに？」

「それはこっちが聞きたいくらいよ…あのバカ、どこ探しても見つからないのよ」

「えっと、何時もの放浪癖なんじゃないんですか？」

そう、実はロロナ先生困った事に放浪癖を持っていて、度々姿を消すことがあるのだ。とは言っても数日程で帰ってくるのだが。つまり今回もそれなのでは？と意味合いを込めた視線を向ける。

「はあ、それなんだけどね、今回はどうも本格的なやつらしいのよ」

「え、まさか本当に？」

「…ええ」

まさか本当に行方不明？

いや、だとしたら騒ぎにならないとおかしい。先生はアーランドでは結構有名な人だし。何だかんだ言って知り合いも多い。それがないという事は、既にある程度の予想がついているってことだよな。

頭を痛そうにしているクーデリアさんには悪いと思うけど、事があるので視線で話の先を促す。もちろん何か知ってるんですよね？

「あー実はね、ロロナが失踪する数日前に、ロロナがある人物と話しをしてたのを見たって人がいるのよ」

「…誰なんですか？」

「……アストリッドよ」

なんて事だ。それはまた面倒事の臭いがプンプンする話しじゃないか。

アストリッド・ゼクセス。アーランド王国が認める歴代屈指の天才錬金術士であり、ロロナ先生の御師匠様だ。錬金術士としての腕は最早比べるのも億劫になるくらいで、まず生きてるうちに私がその領域にとどくことはないだろうと断言できる人物でもある。

と、ここまで聞いたただけならばそう遠くない将来、歴代の偉人になを連ねることになるだろう素晴らしい人物に思える。実際、最初は私もそう思っていた。

しかし、天は二物を与えないとは本当だった。

何が言いたいかと言えば、あの性格に問題があるのだ。

少々気難しく気分屋で、自分が面白いと思ったものにしか興味を示さない。自身のアトリエの存亡にも興味を示さず、その事について国から出された課題も弟子のロロナ先生に丸投げするくらいだ。逆に興味を持ったものには周囲も巻き込み全力投球。下手に本人の能力が高いせいで、発生する被害も凄まじい。

全く、巻き込まれる側の身にもなってもらいたいものである。

そんなアストリッドさんと先生が会っていただって？

しかも、先生が失踪する数日前に？

はい、まず確実に面倒事決定です。

「やっぱり貴方もそう思う？」

「確実に面倒事ですな」

「「……はああ」」

この先に待ちかまえているだろう面倒事を考えて、二人揃って深いため息を吐く。

ため息の度に幸せが逃げるなら、私たちの幸せは既にマイナスの域に突入しかけてるんだらうなあと思う今日この頃である。



さて、ひとまずロロナ先生の安否は心配ないだろうから今は脇に置いておく。何だかんだ言ってアストリッドさんはロロナ先生を可愛がっていたから、命の危険は無いだろう。他のものを失う危険がないとは保証できないが。

それよりも、今ここで問題になってくるのは、先生がいないに生じた派遣団の錬金術士枠である。

これに関しては既に都合の合う錬金術士を探しているらしいのだが、成果はあまりうまくいっていないらしい。

出発予定日まで後わずか。派遣団の物資についてやその他の微調整もあり、現在急ピッチで現場が回っている為この件について余計な人材を割るわけにもいかず、クーデリアさんが中心となって手の空いていた数人が人材選抜の為、身を粉にして働いているらしい。今彼女の手元にある書類もそれに関するものだとか。

「そんな時にタイミングを見計らったように貴方が来たわけ。運命ね、諦めなさい」

「えー！」

「えーじゃない、決定は決定よ。それじゃあ、詳しい話しは明日の会議で説明するから。一時にここに来なさい。遅れるんじゃないわよ」

これでやっと一つ肩の荷が降りたと言わんばかりにすっきりとした顔で再び書類仕事に戻るクーデリアさん。どうやら、彼女の仕事はまだたくさんあるようだ。文句を言おうにも既に次の書類を手に取り、難しい顔でその内容を吟味している姿を見ては何も言いだすことなんか出来ない。

「はあ、皆には迷惑をかけるけど、しばらくの間アトリエは休業かな」

こうして私は先生の代わりにアールズへの派遣団に名を連ねる事

になったのだった。

トトリからメルルへ（後編）（後書き）

この話は基本トトリ視点で進む予定です。

第1話 『お姫様と錬金術士の出会い（前編）』（前書き）

この作品には独自設定や独自解釈が多く含まれております。苦手な方はご注意ください。

第1話『お姫様と錬金術士の出会い（前編）』

錬金術士っ！

第1話『お姫様と錬金術士の出会い（前編）』

ガタンゴトン、ガタンゴトン。馬車の揺れを身を感じながら、持参した小説のページを捲る。ちなみにジャンルは最近読み出した探偵物。前世にはなかった奇抜なトリックの数々が私の時間を盗んでいくのである。

隊列を組んでいる為か馬車の速度は緩やかで、それほど大きな揺れがないのでこうして本を読んでも酔う事はない。正直これには助かった。

アーランドを出発して早一月。その間魔物の襲撃一つもなく、最初は物珍しさで見ていた風景も何時しか飽きてしまい、今ではこうして持参した小説で時間を潰す作業が続いているのだ。

でも、当然それも時間が経てば読み終えてしまうわけで：

「…読み終えちゃった」

本を閉じて呟く。さて、これからどうやって暇を潰そうか。

そうだ、あとのどのくらいで着くか聞いてみよう。馬車の内窓を叩いて声を上げる。

「あのー、今どの辺なんですか」

「ちょうどアールズに入ったところですよトリ様」

「ならあともう少しかな」

「そうですね、アールズ王国までは大体あと五、六時間と言ったところでしょうか」

本当にもうすぐ到着するみたいだ。それだけ分かれば私は満足。あまり彼の邪魔は出来ないから、お礼だけ言って内窓を閉める。

その場で後ろを振り返り、馬車の中を見回してため息。そこには所狭しと積み重ねられた木箱の山。実はこれ、全て私が関係した品である。全て中には錬金術の素材となる物がぎっしりと詰め込まれているのだ。

さて、何故このような大量の素材が積み荷にあるのか疑問に思う人もいるんじゃないかな。

それは私が錬金術士として派遣された事が原因なんだ。

そもそも、今回の人材派遣はアールズの国力増加を目的とした開拓事業の為である。当然派遣される錬金術士に要求されるのは、その腕前を遺憾なく発揮してアールズを大きく発展させる事。

国の開拓に錬金術を用いる事でその発展スピードを加速させる。

錬金術は一人いるだけで国の発展に大きな影響を与える可能性を秘めていると言っても過言ではない。

それは錬金術で大きく発展してきたアーランド共和国がその歴史で証明している事だ。

と、言ったわけで今回開拓事業の為の物資として、この大量の素

材が積み込まれているわけである。勿論、国を開拓するのだからこの程度の物資だけでは当然足りるはずもなく、精々がアールズ側で用意すると言っているアトリエを十分に機能させる程度の量だ。

これは何度も論議した結果、現在アールズ側が出せる最大限の量らしい。それは物資の輸送や投資資金の問題もあるのだが、それ以上に辺境の小国にそれほど価値があるのかと言った疑惑を持つ者が多いことが理由になっている。

：確かに疑問に思うのも無理はないと思う。場所も場所だし、今まで話しを聞くこともなかった国だ。話しの提案者であるジオ様が語るに、アールズ周辺は未だ発展の余地を多く残しており、共和国に名を加えても十分な強国になる可能性を秘めているそうだ。

そんな彼の話しに共感した人々の多くが国民だったのは、共和国になっても未だ消えない彼の人気の高さを物語っている。

実際、いい人だけだね。ただ、正体不明の正義の味方マスクドGなんてやってる暇があったら仕事をしてください。エステイさんが苦労が絶えないと、この前私を巻き込んで行われた酒盛りで涙目ながら語ってましたよ。ちなみに件のエステイさんだけど、ジオ様のお目付役代わりになってから少し老けた。

やはり三十路も終わりに近づき肌の荒れも気になるなか、ストレスを抱える仕事はダメですね。私は基本睡眠時間はきちんと取っている関係ないけど。

まだまだ若いのでお肌はスベスベです。

エステイさんの前で言ったら十中八九殺されるから絶対言わないけどね。

本題に戻るけど、問題なのは今日の前に積み重ねられている木箱はアトリエの運営用の物資だけだって事。

つまり、開拓事業用の材料は現地調達の基本となるわけだ。鍊金術士お得意のフィールドワークってわけだね。

勿論アールズ側も全面的に物資の提供はしてくれるみたいだけど、さすがに現在の国力で全てをカバー出来るはずもなく、足りない分は自身で採取場まで行つての現地調達になる。加えてアールズ周辺の新天地開拓の手助けもしなくてはならない予定だ。

これを知った皆に出発前に心配されて色々言われたけれど、私としてはむしろドンと来いって感じ。何だかお母さんを探して旅をしてたみたいで、今から少し楽しみなんだ。そんな所は私ってやっぱりお母さんの娘なんだなと思う。

それに新天地開拓に関しては後々アールランド側から人材の派遣が決定してるしね。一体誰が来るのか、今から少し楽しみだ。



まだ見ぬ大地と新たな素材との出会いに想いをはせていると、外が何やら騒がしくなってきた。

まさかと思ひ外に顔を出すと前方にお城の姿。目的地であるアールズ王国の象徴アールズ城だ。

「トトリ様！着きましたよ！」

私に気がついた馬車の運転手が嬉しそうに声を上げる。私もそれに笑顔で応え、前方に見えるアールズ城を観察する。

事前に配られた資料によると総人口百人程の小国だって話しかけど、思っていたよりもお城はしっかり作られてる。若干小さい感じ

はするけど、お城はお城だ。その存在がアールズ王国を小国ながらも国として認知させる要因になっているのだろう。でないと、さすがに総人口百人の街を国と言えるか怪しいからだ。

人口問題に関しては開拓事業の進行状況を見て、周辺の町や村を順に吸収統合していけばいい。開拓が進めば新しい住民も外から自然と増えていくことだろう。

さて、アールズに無事到着した私たちはひとまず先方と簡単な挨拶を交わし、用意されていた宿舎で長旅によって疲れた体を癒していた。これは長旅で疲れているだろう私たちに対するアールズ側の配慮だ。

そう言ったわけで、本格的な話し合いは明日行いう事となったのだ。

旅の経験から馬車に乗り慣れていて疲れなど微塵も無かった私は皆には悪いと思いつつ、派遣団の責任者に許可を取りアールズ王国周辺の探索に乗り出したのだった。



アールズの街から出て少しの場所にちょうど良さそうな森を見つけた。

今回の旅の間はずっとじっとしていたので、体を動かしたかった私は愛用の杖を手に取り獲物（魔物）を探す。一応この辺りでどんなものが採れるかも確認しておくのも忘れない。

うーん。どうやら、この辺りだとあまり良い物は採れそうにないみたい。素材集めに関しては、ちょっと遠出しなくてはならないようだ。

ガサガサガサ。

ん？前方の草むらが揺れている。お待ちかねの魔物かな？

手に持つ杖を軽く握りしめ、気を引き締める。こちらの戦闘準備は既に完了。後は相手の出方を待つだけだ。

あ、そう言えば…今更だけど、こっちの魔物って何がいるんだろう？アーランドとは大分距離があるし、全部が全部同じってわけじゃないと思うけど…

もしかして、今まで見たことのない種類かも。あ、そう考えると少し緊張してきた。

そして遂に魔物がその姿を表す。

飛び出して来たのはモチモチの青い球体状の物体に、どこか愛嬌のある目と口のある魔物。

そう、その魔物の名前とは――

「ぷにー！」

「何この脱力感・・・」

毎度お馴染み、“ぷに”である。しかも“青ぷに”。始まりの町に出る魔物代表の青ぷにである。なんか一気に肩の力が抜けた。ここでぷにですか。ぷにはぷにでも、このタイミングだと普通なら白とか黄色とか色違いの新種登場でしょ。

なのに出てきたのが一番見慣れた青ぷにとか・・・

「ぷにー？ぷにぷにー！」

私の反応が気に入らないのか、目の前の青ぷにが何やら喚いている。

はいはい、分かった分かった。別に無視してるんじゃないよー。

「ぷ、ぷにー！ぷにぷにぷにー！」

既にやる気ゼロ、自分の事など眼中にないといった風な私に大興奮の青ぷに。見た目通りの攻撃方法の体当たりで勇猛果敢に襲いかかってくる。それをヒラリヒラリと回避しながら考える。

まだ森の入り口辺りのはずだし、もしかしたらもう少し奥に何か見たことがない素材があるかもしれない。時間は十分にあるし、じっくり探索してみるのもいいか。

あ、目を離している隙に何やら動きがあったようだ。

「ぷにぷにぷに、ぷにー！」

「ぷにー！」

「ぷににー！」

「ぷにににー！」

おっと、どうやら一人では勝てないと判断したのか仲間を呼んだみたい。とは言っても単に青ぷにが三匹ほど増えただけ、どこことなく得意げな様子の青ぷにたちには悪いけど、それで勝てるほど現実には甘くないんだよ？

「「「ぷにー!」」」

「ふっ、はっ、えいっ、やあっ」

———ガスッ、ボゴッ、グシャッ、カキーン!

「「「ぷ、ぷにー!?」」」

同時に飛びかかってきた青ぷに達を長い旅の間で培った棒捌きを用いて殲滅する。今の私の実力からしたら、青ぷにレベルの魔物など正に瞬殺である。

一応、ぷにたちの亡骸から戦利品を拝借しておく。

トトリは”ぷにぷに玉×3”を手に入れた!

手に入れた戦利品を鞆にしまい、まだ見ぬ未知との出会いを期待して森の奥へと足を進める。

さあ、一体この先には何が待っているのか。新たな素材か、新たな魔物か。胸が高鳴る。わくわくが止まらない。まったく、これだから冒険は止められないのだ。

第1話『お姫様と錬金術士の出会い（前編）』（後書き）

自分なりの考えを入れたせいが無駄に長くなったので三分割します。

前回の話しになってしまいましたが、アールズとの併合についてのアールズ側の考えは一部を除き全て作者の妄想です。普通、元国主の提案でも将来性が分からない小国を同盟に加えようとする者は、国を動かす立場でそんなにいないだろうって思いまして。実際批判派を納得させる為にアールズの国力増加を図ってたみたいですし。今回の開拓物資の話もその事が関係しています。

アールズ王国については、自分なりに初期の百人状態であの国が“国”って呼べる要素はなんだ？と考えた時に浮かんだものが城だったんです。いえ、王族がいるのも国の要素だと思いますが、パツと見で分からないという意味ないと思ったんです。

実際人口百人の国なんて、城がなかったら大都市くらいにしか思われませんよ。そこで王族なんて言われたら、私には金持ち貴族の妄言くらいにしか見えません。

第1話『お姫様と錬金術士の出会い（中編）』（前書き）

メルル登場。それにしても、レイティング変更騒ぎには驚きでしたね。知らない方は公式かwikiで。

第1話『お姫様と錬金術士の出会い（中編）』

錬金術士っ！

第1話『お姫様と錬金術士の出会い（中編）』

トトリが冒険者魂をメラメラと燃やしていたその頃、森の奥にある開けた平野で二人の少女が狼の魔物と対峙していた。

「グルルルッ」

「姫様！」

「大丈夫っ、危ないからケイナは下がってて！」

「でも、危険です！」

「へーきへーき！ウォルフの一匹くらい余裕だよ！」

そう言いながら手に持つ杖を構える気品のある衣服で身を包んだ少女に、メイド服を着込んだ少女が不安そうな声をかける。

目の前で杖を構える自分の仕えている少女——メルルはウォルフの一匹程度なら苦戦する事はあっても負けることはないと知ってはいるが、何時ちよつとした事が理由で大きな怪我を負うとも限らないのだ。

もし彼女の身に何かあったら、自分を信じて大事な娘の身の回りを任せてくれた国王のデジエ様に申し訳が立たない。

とは言ってもそれを言ったところで姫様は聞いてくれないんだろ
うな、とメイド服の少女――ケイナはため息をつく。

（はぁ、昔から御側でお仕えしてきましたが、お転婆なところは昔
から全く変わらないですね。もう少し落ち着きを持っていただけ
ばいいのですが…）

そうこうしているうちに、メルルとウォルフの戦いは始った。

まず先に動いたのはウォルフ。狼の体を生かした素早い動きでこ
ちらに接近、その鋭い牙を用いた強力な噛みつきを繰り返す。

「そう簡単に当たらないよ！」

恐怖に目を閉じることなく、しっかりとその行動を目で捕らえて
いたメルルは危なげなくそれを回避する。

「今度はこっちの番！」

――――ボガッ！！

「ガウッ!？」

相手が体勢を整える前に素早く接近して杖で殴りダメージを与え、
相手が反撃に移る前に再び距離をとる。

その身のこなしはとても素人のそれとは思えない。それもそのは
ず、彼女は戦いの心得をきちんと学んでいるのだ。

しかし今はこんな姿を見せていても、彼女はアールズ王国のお姫

様、王の娘なのだ。そんな人物が何故冒険者紛いな事が出来るのか、それには彼女の性格が大いに関係していた。



彼女――メルルリンス・レーデ・アールズは幼い頃から活発で無鉄砲、その上お調子者と、正にお転婆娘を絵に描いたような子供だった。そんな子が城でじっとしてられるはずもなく、その子供特有の好奇心に動かされるまま城の外に飛び出していった。勿論、当時から遊び相手だったケーナともう一人の少年を引き連れてである。昔からメルルという少女は良いも悪いも行動力のある子だったのだ。

当たり前だが、彼女が城のどこを探しても見当たらない事に気づいた大人達は当然大慌て、何か事件に巻き込まれたのではないかと城は騒然とした。そこに満足顔で帰ってきたメルル達、当然お説教が待っていたのは言うまでもない。

しかし、お転婆な彼女がそれで懲りるはずもなく、それから何度も隙を見ては城の外に飛び出すようになった。当時、幼い彼女の興味は全て城の外の世界に向いていたのだ。

それを見たデジエ王はひとまずの手段として勉学を取り入れた。これには当然、自分の娘が危険な事をしないか監視の意味合いも込められていたが、王族として必要な知識を学び始めるには丁度良い頃合いだった事も大きな理由だ。

これにはメルルも困った。毎日毎日お城の中で勉強ばかり。新

しい事を学ぶのは別に嫌ではない。しかし、たまには城の外で思いっきり遊びたい。幼い彼女は徐々に不満を貯めていく。このままでは何時不満が爆発するとも限らない。

さすがにそれは不味いと思ったデジエは外から様々な物語を書き記した書物を取り寄せ、勉強の息抜きにでもと彼女に与えた。これにはメルルも大喜び。寝る間も惜しんで読み明けて、次の日勉強の時間で居眠りしてしまい注意された。

この物語の数々が幼い彼女の心の中に、何時か本でしか見たことがない世界を見たい、という密かな願いを持たせる切っ掛けとなったのは皮肉なものだろう。

さて、厄介事は忘れた頃にやってくるとはよく言ったものだ。何が言いたいかと言えば、数年後、ついに彼女の脱走癖が再発した。いや、彼女の性格を考えればよくもったものだ。正直、油断していた城の者達にはそれを未然に防ぐことが出来なかった。

帰ってきた彼女は所々に小さな傷をたくさん作ってきたが、それに反してその表情はここ数年では見た事が無いほど満足そうなものだった。

それを見たデジエはここに来て娘の本質がやっと理解できた。この子は机に縛り付けておくより、自分の目で、体で学ばせた方がきつと自分の力になるだろう。彼女のその性格は弱みでもあり、強みでもあるのだから。

そうと決まれば、最低限自分の身は自分で守れるように護身術を学ばせる必要がある。自分の実力を正確に把握出来ていれば無茶な行動は控えるはず。

出来れば城の外だけではなく、国内にも目を向けて欲しいものだが。それでも何時かその経験が役に立つ時が来るだろう。全ては彼

女しだい。だから私は見守る事にしよう。

何だかんだ言っても大切な愛娘なのだ、出来るだけの事はしてやりたいし、何より嫌われたくないからな。



「グルル…ガアアッ！」

「これで、トドメッ！」

————ゴスッ——！

「ガアアッ！？」

最後の力を込めて体当たりを仕掛けてきたウォルフに渾身の一撃を放つ。その一撃は正しくカウンターの様に相手に決まりその体力を削りきった。

ウォルフがよろけてその場に身を沈める。

しかしすぐには近づかず、しばらくの間その場で倒れたウォルフに視線を合わせておく。もしもの事もある。魔物の生命力はバカに出来ないのだ。

動かない、どうやら完全に倒せたようだ。ケイナはそれを確認して、ようやくほっと安堵の吐息が出せた。自分の鞆を握りしめ、何

か見落としていた怪我がないかを確認するためにも、目の前で嬉しそうにはしゃぎ回っている自分の幼馴染みの元へ駆け寄る。

「そんなにはしゃいで…メルル、どこか怪我はありませんか？」

「へーきへーき！それよりケイナも見てたでしょ？私の戦いっぷり！最後なんて本物の冒険者みたいだったよね！冒険者メルル、かっこよくない？」

「はいはい、分かりましたから、まずは傷の手当てをしましょうね」

「ぶー、ケイナってばノリ悪い。このくらいの傷なら放っておいてもすぐ治るよー。ほら、私って結構体丈夫だし？」

「駄、目、で、す！感染症にでもなったらどうするつもりですか。しっかり消毒しないとけません！」

目の前で毎回ケイナは心配性だなーと笑っている幼馴染みに深いため息をつきながら、鞆から愛用の消毒液を取り出す。何時も擦り傷が絶えない彼女の為にわざわざ特注で手に入れた特性の品だ。

普通の物より少しだけ殺菌力が強い事に加え、少しだが傷の回復を早める特性を持つ為、魔物との戦闘で傷を負った時などは毎回お世話になっている。

その有効性は推して知るべし。今では大量注文で相手が割引をしてくれる現状である。

ちなみにこの商品の存在を知った時の彼女の様子と言ったら、それはもう神に感謝しますと言わんばかりの物だった。幼い頃からお転婆娘に振り回されてきた彼女の気苦労は生半可なものではなかったというわけだ。

「それにしても…」

「んー？どうかしたのケイナ」

「いえ、最初の頃から比べると本当に強くなったなと」

そう、ケイナが言うようにメルルは本当に強くなった。最初の頃は杖に振り回されて重心もすっかり取れず、相手の出方を待つ心の余裕や、その動きをよく観察して冷静に対処する観察眼なんてものは全くなかった為、魔物の中でも最弱と名高い青ぷににさえ苦戦していたのだ。それが今や誰が見ても魔物と呼べる力を持つウォルフ相手に、一対一といった条件付きだが勝つことが出来るのである。一国の姫の実力としてはなかなかのものだろう。

そもそも、普通はお姫様が魔物相手に冒険者紛いな事をしている時点で何か可笑しいのだが。

「ふっふーん！今の私にかかればウォルフの一匹や二匹、目じやないね！」

「はあ、メルル、あまり調子に乗っては駄目ですよ？」

「もー分かってるよ。ケイナは心配性だなー。私だってさすがに一人でそんなにたくさん相手を出来るとは思っていないよ？」

「なら、いいのですが…」

「そもそも！こちら辺にははぐれウォルフしかいないでしょ？群れがいなきゃ大丈夫だよ！」

そんな話しをしていると、近くで何か動く音がした。それに気づいた二人は話しを止めて音の発生源を探す。

ガサガサガサ。

斜め前、林の中に何かいるようだ。魔物？ケイナを下がらせて杖を握りしめ、メルルはそこに意識を集中さる。やがて、その場にゆっくりと姿を現したのは――

「グルルルッ」

「えーまたウォルフ？」

「メルル、油断しては駄目ですよ？」

「へーきへーき！私を倒したいならもっと数をもってきてなさい！あなた一匹なんて今の私の敵じゃないもんね！」

「グルルルッ、アオオーンッ！！」

ガサガサガサ。

「「グルルルッ」」

「う、嘘！？…もしかして私のせいだったり？」

彼女の挑発を受けてか、ウォルフが遠吠えをすると林の中から次々に新たなウォルフが姿を現す。最初に現れたのと合わせて数は四、真面目に不味い。

「あはは、ちょっとピンチかな？」

「ちょっとじゃないですよ！メルル、早く逃げましょう！」

「うーん、でも見逃してくれそうにないよ？」

目の前でやる気満々なウォルフ達を見てそう呟く。向こうは既に戦闘態勢だ。此方の出方を窺っている。どうやらあのウォルフ達は同じ群れの仲間のようなのだ。

「ケイナは下がって。私が注意を引きつけるから、隙を見て逃げて」

「でも、それではメルルが！」

「大丈夫！私一人なら何時でも逃げられるから！」

「そう、ですね…分かりました。でも、無茶はしないでくださいね？」

「分かってるよ！」

一歩前に出て杖を構えるメルルの言葉に従い、ケイナは後方に下がって相手の様子を窺う。

（でも、縄張り意識が強いウォルフがあんなに息が合ってるなんて…もしかして群れの仲間？ここら辺には“はぐれ”しかいないはずなのに…）

彼女達は知らない事だが、最近この森に流れてきたウォルフが他のはぐれ達を締め上げ群れを形成していたのだ。

睨み合いはすぐに終わった。ウォルフ達が一斉に襲いかかってくる。どうやら狙いは私らしい、メルルは飛びかかってきたウォルフ達を余裕を持って回避する。

「そんな攻撃じゃ当たらないよ！」

連携も何もない単純な攻撃なので比較的回避は簡単だ。学んだ護身術にも一体多数の戦い方があったので、注意すべき事柄も理解している。

こういった場面では一体に意識を集中しない事、なるべく多くの相手を視野に入れるような位置取りを心がける事が重要。後は相手の隙を見て反撃。無理な攻撃は危険なので、極力行わない。

それが功を成してか、最小限の傷で相手にダメージを与えていく。

一方、それで面白くないのはウォルフ達である。数では勝っているのに相手はなかなかダメージを与えられず、逆に自分達は確実にダメージを受けているのだ。

ウォルフ達はその怒りでますます動きが直線的になり、その為、その攻撃は余計に見切りやすくなる。此方側の弱点であるケイナに目もくれない事がその怒り具合をよく表している。この状態を維持出来れば私でもなんとかかなりそうだ。と、思っていた矢先。

「これなら…ッ！」

————ガキイン！！

「く、何!？」

「グルルルッ」

「また増えた！しかも何か強そうな奴！？」

真横から不意をついて行われた攻撃をどうにか防いで、攻撃してきた相手に目を向けると、そこには今まで存在しなかった新しいウオルフの姿が。しかも、よく見ると他の奴より若干大型で強そうなウオルフだった。

「グルル、ウオオ——ンッ！」

そのウオルフが一鳴きすると、今までバラバラに動いていたウオルフ達が急に動きを変える。

「ガアアッ！」

「く、何で！？いきなり動きが変わった！まさかあのウオルフ？」

視線を向ける先は先程戦闘に乱入してきたウオルフ。ウオルフ達が突然動きを変えたのは、どうやらアイツが原因らしい。
ならアイツをどうにかすれば——

「きゃあ！」

「ケイナ！？？」

「ガアアッ！」

「ッ！邪魔しないで！」

どうやら親玉に集中してたせいで、ケイナにまで注意が行かなか

ったようだ。

（く、今まで見向きもしなかったケイナを狙うなんて！あのウォルフ、今までの奴より頭がいい！）

ケイナに襲いかかろうとしているウォルフを見て、私は急いで助けに向かう。それを遮るようにウォルフ達が目の前に表れ攻撃を仕掛けてくるのを、ダメージ覚悟で直進、彼女の元に突き進む。

「ケイナ！怪我はないッ！？」

「メルル！？私は平気です、それよりメルルが！」

実際ケイナに目立った傷は無かった。彼女もメルルが護身術を学ぶ際に、共に学んでいた時期があったので、何とか敵の攻撃をしのいでいたのだ。

逆にメルルは無茶な行動で体中傷だらけ。助けに来た相手に心配される始末だ。

「グルルル…」

「メルル、ウォルフが！」

「嘘、もしかして囲まれた？」

二人を逃がさないようにウォルフが周りを取り囲む。今の状況は最悪だ。向こうは統制が取れたウォルフ達、一方此方はケイナの存在が取れる行動を減らしている。加えて最悪なのが、向こう側にはまだあの親玉ウォルフが残っている事。見た所、その実力は恐らく普通のウォルフの倍以上。本格的に参戦してきたら戦況は一気に彼

方側へと傾くはず。そこまで考えて今更ながら気がつく。

そうになったら待っているのは――死？

「メルル？」

「…ケイナ、こんな事に巻き込んでごめん」

「突然何を――」

「でも心配しないで！ケイナだけは何とか逃げられるようにするから！」

自分の我が儘に付き合わせて、こんな状況に巻き込んでしまった大切な親友。自分の事は自業自得だけど、彼女はただ巻き込まれただけだ。だから、せめて彼女だけは何とかして助けてやりたい。そう決心すると杖を構えてウォルフ達を睨みつける。

「はあ、メルル？私が貴方を置いて逃げると思ってるんですか」

「で、でも、ケイナは巻き込まれただけで…」

「そうですね。ですが私は好きで巻き込まれたんです」

「う、でも、死んじゃうかもしれないんだよ？」

「それはメルルも同じです」

「うー、でもでも…」

あーとか、うーとかうなって何とか言葉を捻り出そうとしてる親友を見て、ケイナは呆れてため息をついた。彼女の言いたい事は分かるけど、私だって彼女の事は大切なのだ。

「メルル、それなら尚更です。親友なんですから最後まで一緒、当たり前でしょう？」

「ケ、ケイナあ」

「もう、メルルったら。：ほら、そろそろ相手も我慢の限界みたいですよ？」

彼女の言う通りウォルフ達は我慢の限界だった。親玉ウォルフの命令なのか、今まで此方を見て唸るだけだったので、こうして会話が出来ていたのだ。

空気を読んだ親玉ウォルフには少しくらい感謝してもいいだろう。二人とも絶対口には出さないが。

「ウオオ——ンッ！」

「「「グルルッ、ガアアッ！！」」」

「メルル！」

「うん、行くよケイナ！」

———戦闘が始まった。

第1話『お姫様と錬金術士の出会い（中編）』（後書き）

メルルの過去話は作者の妄想です。

人物設定やゲームプレイ中に考えた事が混ざり合った結果生まれたお話です。

魔物と戦闘についてですが、冒険者でも何でもない一般人のメルルがまともに戦うには護身術くらい教わっていないと無理でしょ、と思います。血筋的にはトトリと同じ要素があるようですが、さすがに戦闘技術なしで魔物に勝つのは難しいだろと思ったわけです。ただ潜在能力はあるので成長率が高い、武道派なEDが二つもあるし。

第1話 『お姫様と錬金術士の出会い（後編）』（前書き）

これが錬金術士の戦い方です。

第1話『お姫様と錬金術士の出会い（後編）』

錬金術士っ！

第1話『お姫様と錬金術士の出会い（後編）』

——ドシッ！

「ッ！」

「ケイナ！？このッ」

——ボガッ！

「ガアッ！？」

ケイナにまとわりついてた一匹を殴り飛ばし、再び彼女の近くに移動する。今、ウォルフ達は二人を分断するように戦っていた。三体がメルルに、そして一体がケイナにまとわりつき攻撃を繰り返している。メルルはどうか戦えているが、ケイナはそうも行かない。

そのフォローに意識を向ける事が多いメルルも、やがて体力を削られ限界が近づいていく。

「大丈夫？」

「すみません、私のせいで…」

「いーよ、気にしないでケイナ」

「はい…ッ！　メルルッ後ろ！」

「え？　ッ！」

「…………ガキイイン！」

「くうう！」

今までにない強い衝撃、それを繰り出した相手は今まで静観していた親玉ウオルフだった。恐れていた最悪の状況が彼女達に訪れた。

「グルルッ、ウォオ——ンッ！！」

「「「ガアアッ！！！」」」」

「これは…覚悟決めなきゃ駄目、かな」

「そう、みたいですな」

再び親玉の元に集まって唸り声を上げるウオルフ達に、とうとう本気を出してきたかと二人は覚悟を決める。

そう、今までの戦闘は全て彼女達の体力を削る為の前座、ボスである自分を加えたこれからが本番、確実に相手を仕留めるのだ。実に嫌な奴である。

この滑稽さこそが彼を、はぐれ達のボスの座に押し上げた一番の理由だったりする。

だが、彼にはこの場限りとは言え運が無かった。いや、この場合はメルルとケイナが幸運だったのか。

忘れてはいけない。この森には彼等の他にも最強クラスの錬金術士がいたという事を。



両者の緊迫した睨み合いは突然の第三者による介入で幕を閉じる事となった。

それに最初に気がついたのはメルルだ。最悪な現状を打開すべく、周囲に意識を巡らせていた彼女は、不意に視線を上げた時、空に小さな光りの点を見つけた。

今はまだ星が出る時刻ではないけど一番星かな？何か可笑しい気もするが今気にすることではない。今は星なんかより現状を打破する手段を探さないと。そう思って視線を相手に戻すが、何故か気になり再び空に。星の数が増えていた。意味不明である。

「…メルル、どうしたんですか」

「えっと、星が…」

「星見なら後にしてください」

「いや、そうじゃなくって」

メルルの様子が可笑しい事に気づいたケイナが相手を警戒しながら、どうかしたかと尋ねると、返ってきた言葉は星がどうこうといったもの。

彼女が真面目に現状打破の方法を考えてくださいといった意味を含めて、少しキツメの言葉を返してしまったのも仕方がない事だろう。

「あ、なんか大きくなってきてるような？」

「メルルッ！」

「本当だって！でも、あれ？大きくなってるとて事は…」

———ゴオオオオオオ

その音にはその場に居る全員が気づいた。まるで空気が震える様な音、その発生源はどこか、自分達の足元に影が指したところで皆一斉に空を見上げた。

視界に入ってきたのは無数の星々。それが凄い速さで落下してきていた。既に大きさが確認できる程近い、これでは回避は間に合わないだろう。

「メルル、逃げない！」

「大丈夫、私たちじゃない」

だが、メルルにはそれが自分達を狙ったものではない事が分かっていた。その影がウォルフ達の足元にしかなかったのを、しっかりと見ていたからだ。

そして、慌てふためくウォルフ達を後目に、無数の星の輝きが流星群の様に彼等へと降り注いだ。

——ドッドドドドドドガァンッ！！！！

爆音と共に次々と星が降り注ぎ、辺り一面を煙で覆い隠す。流星群は十秒ほどで終わりを迎え、煙が消えた後には——何も無かった。

落下地点の地面は抉れ、辺りにはバラバラに千切れたウォルフ“だった”モノが焼け焦げた状態で散乱していた。

「これ：助かったの、かな？」

「え、ええ。そう、ですね？」

突然目の前に降り注いだ流星群の威力に唾然としてしまい、二人共うまく言葉が出ない。だが、助かったという思いが体に染み渡ってくる、次第に落ち着きを取り戻していく。

そうになると気になってくるのは今の謎の流星群だ。あれは明らかにウォルフ“だけ”を狙っていた。あのタイミング、精度、あれが偶然なんてあり得ない。明らかに人為的なものだ。

その事について考えていた矢先——

ガラッ。

「グルル…」

「嘘…あの親玉ウオルフ、生きてたの!？」

「そんな…こちらは疲労で動けないのに」

土に埋もれた体を起こし、今まさに此方に飛びかからんばかりの様子の親玉ウオルフ。その体には先の流星群によって負った無数の傷跡があるが、どれも致命傷には至っていないのか、その立ち姿は未だ十分力に満ちている。

一方、彼女達は張り詰めていた緊張感が途切れた際、今までの疲労が一気に体に表れてしまっていた為、まともに動くことが出来ない状態だった。

「ガアアッ!！」

一難去ってまた一難。しかも相手は手負いの獣状態、凶暴性は今まで以上だ。今の奴は恐らく万全の状態でも彼女達ではまず勝てないだろう。

だが、“彼女”の相手には少し役不足だった。

「やらせない」

———グシャアッ!

「ガアアッ!？」

突如現れた影がメルル達に向かって飛びかかろしていたウオルフ

を殴り飛ばす。

その一撃は相手に致命傷を与える程の威力を持っていた。吹き飛ばされたウォルフはふらつきながらも起き上がり、自分を殴り飛ばした相手に対し怒りに染まった目を向ける。

「なるほど、メテオールに耐えるだけのことはあるね」

メルル達を守るように立っている“彼女”。その視線は正確に相手の実力を測っていた。

彼女は後ろに振り返り、此方をポカンと見上げていたメルル達に言葉をかける。

「危なかったね、大丈夫だった？」

「は、はい…」

「……」

二人の様子を確認して大きな怪我が無いことに安堵する。一人が未だ嘔然としたままなのは気になるが、今は目の前のウォルフを倒してしまわないと、落ち着いて怪我の治療も出来ない。

「貴方には悪いけど、速攻で終わらせるよ」

「グルルツ、ガアアツ!!」

飛びかかって来たウォルフを杖でいなして鞆から赤い筒を取り出し、擦れ違い様に相手に投げつける。

次の瞬間、ウォルフを中心に閃光が走った。

——ドオオオオンッ！！

爆音が辺りに響き、ウォルフを炎が包み込む。ドサリ、と地面に落ちたウォルフは既に絶命していた。

正に一瞬の出来事だった。自分達が勝てないと考えていた親玉ウォルフを彼女は慣れたように対処し、瞬く間に倒してしまった。

今の爆発の規模にしては明らかに威力が可笑しい爆弾といい、もしかして、さっきの流星群もこの人が？ そう思ったケイナは目の前の彼女に目を向ける。

「うん、今回のフラムは結構良い出来かな」

歳は私達よりたぶん上、でもそれ程離れてはいなさそう。胸周りがちょっと悲しいが可愛い人だった。

そんな彼女は今までに見た事がない種類の服を着ていた。一目見ただけで分かる蒼い上質な生地には、簡単だが綺麗な刺繍が施してある。レオタードのような作りの下半身には上半身の布が花卉のように分かれていて、スカート代わりなのかそこに薄いフリルが巻かれ、動きやすさを阻害しないようにしていた。その頭には大きなカチューシャに装飾を施した物を乗せている。

「これ、怪我によく効くから使って」

「あ、有り難うございます…」

手渡されたのは緑の何かが入った小さな壺。話しの流れから察す

るにどうやら塗り薬のようだ。今まで見た事がないけど、何と言う薬だろう。よほど興味深そうに見ていたのか、彼女が苦笑して名前を教えてくれた。

この塗り薬の名前はヒーリングサルヴと言うらしい。

こちら辺では聞いた事のない名前だったが、命の恩人を疑うなんて事はしたくない。指で薬を掬い出し、隣で未だ惚けた様子で彼女を見つめる親友の傷口に塗り込む。

驚くことに効果はすぐ目に見える形で表れた。

「凄い：こんなに早く効果が出るなんて」

「即効性が強みだからね、それを突き詰めたんだよ」

「：まさか、この薬は貴方が？」

「そう、自信作なんだ」

これにはかなり驚いた。あんな流星群を呼び出した事と言い、今の爆弾やその戦闘力と言い、凄いなってものじゃない。明らかに普通の人ではない、一体彼女は何者なんだ？疑問は尽きないが、それを尋ねようとした矢先、複数の大声が森に響いた。

「姫様——、姫様——何処ですか——！！」

「あの声……」

「私が城の人に連絡しておいたんだよ」

聞こえてきたのは聞き知った人達の声、城に在住している警備の兵士達だ。どうやら目の前にいる彼女が、城の皆に連絡をしてくれ

ていたらしい。

しばらくして兵士達が姿を現すと、彼女は彼等に近づいて行きその中の一人と話しを始めた。私達の元には数人の兵士が駆け寄ってきて、口々に安否を確認してくる。それに落ち着いて対応していると、話しを終えた彼女が戻ってきた。

「ごめんね、私ちょっと急用ができたから帰らないと。でも、街まではこの人達が護衛してくれるみたいだから安心してね？」

「はい、危ない所をありがとうございます。貴方がいなければ私達は今頃どうなっていたことか……」

「気にしないでいいよ。でも、間に合って良かった」

「はい：ほら、メルルも惚けてないでお礼を言わないと——」

「あ、あのッ!？」

彼女と別れの挨拶を交わしていた最中、今まで黙っていたメルルが突然声を張り上げた。それに驚きつつも彼女が視線を向けると、そこには興奮で顔を赤く染めた少女の姿が。

「な、名前！あなたのお名前は!？」

「あ、そういえば聞いてませんでした」

二人の少女の熱い視線を受けて、そう言えばまだ名乗ってなかった事に気がついた彼女は、小さく笑みを浮かべてそれに応えた。

「私の名前は、トトリ」

———錬金術士の、トトリだよ。

第1話『お姫様と錬金術士の出会い（後編）』（後書き）

この作品のトトリはノーマルエンド後の能力を引き継いでいます。ですが一人で倒せるほどこの世界のボス級魔物は甘くありません。基本的に人間のスペックには限界があるので、仲間と協力してこそ個人が実力を発揮します。

なので相性が良い仲間とパーティーを組んだ時のトトリの強さは圧倒的です。まさに爆撃機状態。

N/A連発、天球儀連発は当たり前、仲間の回復も一手にこなす錬金少女トトリに進化します。

第2話『弟子入りと準備期間』（前書き）

文章量は毎回変化するかも。基本このくらいでいきたいです。

第2話『弟子入りと準備期間』

錬金術士っ！

第2話『弟子入りと準備期間』

アールズ側との会談を無事に終えた私は他の派遣団員と分かれて、開拓事業のために用意されたアトリエを目指して歩いていた。

「えっと、ルーフェスさんの話しだと川に沿って行けばいいんだっ
たよね？」

会談では様々な事が話し合われたが、お互いに意見の相違も特になかったので滞りなく終了。派遣団のメンバーはすぐに自分達の持ち場に向かうため部屋から早々に退出していき、その場に残ったのは私と執事服の男――ルーフェスさんだけになる。

私はその後、開拓事業に今後誰よりも深く関わる事になるだろう立場から、彼とアールズ王国の今後の発展計画について協議を行っていた。

実は彼――ルーフェス・フォールケンは国王付きの執事でありながら、国政のほとんどを行うほど有能な人物だった。今回の会談でも彼一人が全て対応していたのを見れば、国王の信頼の厚さも推し量ることが出来る。

錬金術についてもある程度は知っており、自然と話し合いは主に私の錬金術がどの程度の事まで出来るのか、と言ったものになった。

ちなみに私の錬金術士としての腕は、アーランドの中でも比較的上位に位置している。

歴代の偉大な錬金術士達は、新しい物を次々に生み出し、アーランドの発展に深く関わってきた。

錬金術の万能性はそれを学んだ私自身が一番よく分かっている。

真面目に出来ない事が見当たらないのだ。

回復アイテムに、戦闘に役立つ各種アイテム、様々な特性を備えたアクセサリ、武器や鎧と衣服の元になる素材、建造物の材料、果ては食料まで。まさに万能技術。アーランドが大きく発展したのも頷ける。

さらには膨大な知識と時間、錬金術士としての腕前が必要だが、新しい物質まで創り出せるのである。

ここに今でも錬金術士が重宝される最大の理由がある。それは彼等が最新技術を生み出す鍵となるからだ。

常に他国の先を行く、錬金術で発展してきたアーランドでは当然の考えである。故に錬金術士の重要度は高い。

さて、ここで問題となっているのは私の錬金術士としての腕前。どの程度の事が出来るかってお話。

これには、少し困った。実は私、錬金術のレシピ本に載ってるような物は、大抵の物が作れるのだ。つまり、彼の質問への答えは出来ない事は余りないとなる。

だが、これを正直に伝えてしまうと自分の研究の時間が取れないくらい重宝されるのではないか？という考えが頭を過ぎる。それはちよつと遠慮したい。

その辺りの事も含めルーフェスさんに話すと、彼は錬金術のあまりの万能振りに改めて頬をひきつらせつつも、私の要望を受け入れた計画案を練り始めた。途中で幾つかの質問に応え、計画案がある程度のまとまりを見せたところで、ひとまず今回の話し合いは終了となった。

私はその後、ルーフェスさんにアールズ在住時の滞在先にもなる予定のアトリエについて説明を受け、現在その場所を目指して移動中という訳だ。

「それにしても、なんだか村にいた頃を思い出すな」

アトリエはどうやら街の端にあるようで、今まで街中を突き進み、転々と店が並ぶ緑にあふれた下通りを抜けてきたのだが、その雰囲気自分の故郷の村に何処か似ていて少しだけホームシックになる。街の外側に隣接して流れる大河に沿って、少し坂道になっている道をゆったり進むと、前方に水車と大きな煙突が目立つ建物が見えてくる。

あの建物がそうだろう。私は自分が少し駆け足気味になるのを自覚してちよつと笑ってしまった。



「ふう、ここが私が五年間お世話になるアトリエか…」

荷物をその場に置いて、正面から建物を見上げる。外見は一般的なアトリエの作りをしている。ただ、場所が場所なのでスペースを気にしなくて良かったのか、アーランドにある一般的な錬金術士のアトリエより大分大きい。ルーフェスさんから聞いた説明だと、十分とは言えないが住居スペースも備え付けられているようだ。

これはまさに願ってもみない事だった。基本的に、調査や研究でアトリエに籠もり気味となる錬金術士にとって、アトリエで生活できるという状態は理想そのものだ。そして目の前の建物は、今回の件ではまさに求められた要素を全て持ち合わせた最良物件だった。

「わ、すごい広い」

中に入って、まず口に出たのはそんな言葉。外見通りに広々としたスペースが目に入る。アトリエの作りは何処でも変わらないのか、建物を丸々一つ使った大きな作業場だ。

奥には錬金術とは切っても切り離せない大人一人が余裕で入れるくらい大きな釜が二つ。

脇にはソファアールとロフトがあり、ロフトの上は住居スペースなのかベッドと箆笥が置いてある。

ちなみに作業机は入り口のすぐ側だった。

「足りない物もあるみたいだけど、必要な物は…うん、だいたい揃ってるかな」

一通りアトリエ内を見て回り、ある物と無い物を確認して必要な

物はメモを取っておく。後はアーランドから持ってきた物資を使って簡単な改装を行うだけだ。

アイテムを収納するためのコンテナが見当たらないけど、もしも
の時のために持ってきておいてよかった。あれがないと材料や調合
品の管理が大変だからね。もちろん、品質悪化防止対策の祝福のコ
インもきちんとして持ってきたよ。あれがあると収納した物が長持ちし
て凄く便利だし。

あれ？何か引かかるような、何だろ？物資、アイテムボックス、
収納、アイテムボックスに収納：

「あ、最初からアイテムボックスに入れてくれば良かったのか」
今頃そんな当たり前の事に氣いて、私は少しへこんだのだった。



さて、私がアールズに来て早くも一月が過ぎた。

アトリエの改装も無事完了し、ルーフエスさんとの錬金術を用い
たアールズ発展計画案の協議も細かいところを残してほぼ終了。
今はアトリエでその準備をしながら、自分の研究に時間を使っ
ている。

現在の研究内容は、N/Aの量産性の強化と特性の強化だ。

N/Aはフラム系統の上位にあたる爆弾で、その威力は広範囲を一瞬で焼け野原に変えられるほどである。なので、使用時には細心の注意を必要とする。

味方を誤って爆発に巻き込まないようにするのもそうだが、問題なのが使用後の地形の変化である。これは錬金術で作り出した他の戦闘アイテムにも言える事で、メテオールなんかは使用後の地形が穴ぼこだらけになってしまい、街道なんかでうっかり使ってしまうと大変な事になってしまうのだ。

それらに比べると、爆弾系統に関しては空中で爆発させるよう計算しておけば、意外と簡単に効果的に周囲への影響を減らす事が出来るので私は愛用している。

今回の研究も自分が愛用している爆弾系統のN/Aについてだ。

実はこのN/Aと言う爆弾は調合するのに凄く手間がかかり、量産に向かないアイテムなのだ。ここが多用する私としては少し残念な部分で、これさえ解決出来ればフラムで時間がかかっていた魔物との戦闘も、より少ない時間で終わらせる事が出来るはず。

つまり、その分探索に力を入れられるのだ、それを研究しない訳がない。

もう一つの研究内容は付加する特性について。

錬金術の優れたところは、何もその豊富なレパートリーや未知の物質を創り出すところばかりではない。もう一つ、とても重要なものがある。

それは錬金術で調合した物に、材料が秘めた特性を”引き継がせる”事が出来ること。

簡単に説明すると、火に強いという特性を持った材料Aと、水に

強いという特性を持った材料Bを組み合わせる事でAとB両方の特性を持った、火と水の両方に強い素材を作り出せるのだ。

もちろん、物によっては普通に加工して作り出す事も出来るが、その場合は材料が持つ特性の多くが行程の最中で失われる。これに反して、錬金術を用いて作られた物はその特性を100%発揮する事が出来る。

この特徴を用いて錬金術士は調合品に様々な特性を持たせ、多種多様な特性を持ったアイテムを作るのだ。

ただし、特性の付加については様々な要因が存在するので、一概に何でもかんでも混ぜればいいと言う訳ではない。

まあ、これについての説明は今なくていいだろう。理由は後に分かる。

今までの話から分かる通り、N/Aにもこの錬金術の特徴を用いる事で、限られた数ではあるが任意の特性を持たせられる。材料となるフラムから色々と吟味しなくてはならないが、その結果は目に見えて表れるため、気が抜けない作業が続く。調合段階に入ればある程度気を休める事が出来るのだが、私にはゆっくりと休む時間はあまりない。

なぜか？簡単なことだよ。ほら、今日もそろそろ来る頃かな。

「先生ーッ！いますかー！」

元気よく声を上げて、飛び込むように入ってきたピンク色の髪の少女。彼女は私の姿を目に入れると、初めて会った時と同じ、熱い視線で此方を見つめて言うのだ。

「今日もよろしくお願いします！ トトリ先生！」

「うん、よろしくねメルルちゃん」

彼女の名前はメルル・リンス・レーデ・アールズ。愛称はメルルちゃん。私が今回、錬金術を教える事になった女の子だ。まだちょっと危なっかしい彼女。さっそく始めた調合も――

「わ、ちょ、わわわわわッ!？」

「メルルちゃん、ダメッ!」

――ドカアアアアンッ!!

あはは…まだしばらくはゆっくり出来ないかな？

第2話『弟子入りと準備期間』（後書き）

今回は主に錬金術について。どんな事が出来るのかといったもの。いや、ほんとにいろいろ出来るんですよ。本文中の例には上げませんでしたが、人造生命体、俗に言うホムンクルスも作れます。まあ錬金術でパイを作ろうとか言われた時は、そんなの調理場で作れよ！ってつつこみを入れてしまったのはいい思い出。

メルルの弟子入りについて詳しくは次回で、ちなみにトトリのコンプレックス話も少々。

最後にここでちょっと報告が。実は今週末から来週一杯にかけて用事が重なって書く時間が取れない…少しずつ書いてくつもりですが、恐らく次回の更新は再来週になりそうです。

第3話『トトリ先生の錬金術講座（前編）』（前書き）

今回はメルルの弟子入りについて。あと、予告通りトトリのコンプレックスも少々。

第3話『トトリ先生の錬金術講座（前編）』

錬金術士っ！

第3話『トトリ先生の錬金術講座（前編）』

メルルリンス・レーデ・アールズはその名から分かるようにアールズ王国のお姫様だ。

お転婆娘を絵に描いたような性格の彼女は、よく城を抜け出し街を練り歩いている。当然自国のお姫様のそんな行動は、街の人々には知らない者がいないほど知れ渡っているのだが。

皆が昔から彼女が元氣よく走り回り、成長していく姿を見てきたのだ。メルルもそんな大勢の人々に見守られ、素直で何事にも一生懸命な優しい子に育っていった。

これはアールズが小国であるが故に、人と人との繋がりが深い環境が作り出された結果である。アールズ国民は皆が皆、とても良い人なのだ。

そのようなわけで、昔から街の住民と関わりが多い彼女だったが、そうなるど何時しか愛称で呼ばれるようになっていく。

本名であるメルルリンスの頭部分を取って“メルル”、彼女は皆に親しみを込めてメルルと呼ばれるようになっていった。

そんなメルルだが、現在懂れている人がある。その人はピンチだった自分達の前に颯爽と現れ、不思議な道具を使って瞬く間に危険から救い出してくれた。

彼女の戦っている時の凛々しい顔付きや、その後自分達に向けられた優しい眼差しに胸が高鳴った。

これだ、この人なんだ、と自分の中の何かが叫び声を上げる。体の奥から溢れ出す興奮に体を突き動かされながら、知らず彼女は声を張り上げた。

そして、出会ったのだ。メルルが生涯最も尊敬することとなる最高の先生であり、永い時を共に生きていくことになる最高の友人に。

彼女の名前はトトリ、錬金術士のトトリと言った。



私がメルルちゃんと再会したのはアトリエの改装が終わり、一息ついている頃だった。彼女は突然アトリエにやってきて弟子入りを願いだした。

当然、いきなりそんなことを言われてこっちも困ったんだけど。ひとまず、詳しい話を聞いてみることにしたのだ。

まず、彼女の名前を聞いて驚いた。最初に会った時も上質な服を着ていたからてっきり貴族の娘だと思っていたんだけど、その正体は予想を大きく飛び越して、なんとこの国のお姫様。

お姫様がこんな所に来たり、あんな森の奥に行ったりしていいんだろうか？後に街の人から聞いた話だと、メルルちゃんのそんな行動は日常茶飯事らしい。皆、笑いながら話してくれた。

いいのかそれで！

つい、突っ込みを入れてしまったが、後でよく考えればうちの元国主も負けないくらい自由奔放な人だった。いや、公の場を退いた今、規模はうちの方がひどいか。

ああ、エスティさん今頃過労で倒れてないかな：

そんなメルルちゃんの外見は胸元が大きく開いたコルセットにオレンジ色の長袖とスカートを付けたような洋服で、スカートの丈は短く、下には俗に言うカボチャパンツを履いている。襟元には赤いリボンが映え、肩にはシワ一つない短いマント。髪はフェーブのかかった薄いピンク色で、一部を後ろに結って他は全部おろしている。極めつけは頭の上に乗った小さな王冠。見た感じ、紐もないのに斜めに頭にくつついている。：気にしたら駄目なんだろう。

改めて見ればその着こなしなどから王族に見えなくもない。ただ、本人の親しみのある性格からか、オーラと言えるものがあまり感じられないが。

今だって、私の話を聞きながらキラキラとした瞳を此方に向けてくる。その姿はまるで新しいおもちゃを買って貰った時の子供のようだ。

……一部、子供じゃない部分があるけど：ね？ふふふ、メルルちゃんったらあの歳で私よりも“ある”んだよ：、私より四才も年下なのに……なにが？胸だよ、胸！この子、普通に谷間が作れるんだよ！？

私なんか未だに作れないのに！

ううう、なんで私の周りは皆胸が大きいのか？メル姉さんとかパメ

ラさんとかコロナ先生とか：

姉妹なのにな：お姉ちゃんも大きいし。私だってお姉ちゃんみたいになりたい！

：そりゃあ前世を思い出した後は、胸があるのはちょっと嫌だとか考えた時期もあったよ？でも、持たざる者になって初めて気付いたんだ。あの母性の塊がもの凄く羨ましい：って。ううう、なのに未だに育つ気配がない：、お母さんとお姉ちゃんのどっちも大きいから遺伝子的には悪くないはずなのに：

ちなみに、後にメルル付きのメイド少女ケイナが隠れ巨乳だった事実が発覚して、シヨックのあまり丸二日も不貞寝する事になるとは思ってもみなかったトトリであった。

頑張れトトリ、負けるなトトリ、何時かはきっと大きくなるさ！
まあ、運命は残酷だって言うておこう。



トトリが現実には打ち負かされている様子を、その原因となったメルルは何だかよく分からないといった顔で見ている。彼女はその手の話までお子様だったのだ。ちなみに初恋もまだである。お姫様の初恋なんて叶わない確率の方が高いのでしない方がいいのかもしれないが。

自分の容姿については無頓着とまではいらないが、あまり理解してない節がある彼女だ、自分の胸の大きさをなんてあんまり興味がなかった。あまり大きくなりすぎるとコルセットが胸を圧迫して苦しくなりそうだとは思っているの、現在成長期な体だが胸はもう別に大きくならなくていいと思ってる。

トトリが聞いたらブチ切れ確実な内容である。

さて、そんなメルルだったが、なぜいきなり押し掛けるようになって来て、弟子入りを頼んだのか。その過程を簡単ながら説明しよう。

彼女はまずあの衝撃的な出会いから、トトリの姿が強く目に焼き付いていた。所詮、憧れの人になったのだ。彼女は強くて、格好良くて、優しく、不思議な道具を持っていて、とにかく凄い人だと思った。そんな彼女の事が気にならないはずもなく、城に帰ったメルルは森で彼女と話していた兵士長を捕まえて、彼女について知っていることを聞き出した。それによって、彼女がアールズの開拓事業のためにアールズから派遣されてきたことを知ったのだ。

後は簡単だ、その類の話は自身の教育係であり、アールズ王国の行政を一手に担っているルーフェスに聞けばいい。そうと決まればと、メルルは持ち前の行動力ですぐにルーフェスの執務室へと突入。当然、いきなり押し掛けられた彼にはいい迷惑だったが、国の開拓事業に少しでも興味を持っていただければ、と詳しい話を説明してくれたわけだ。

その話にはもちろんトトリの錬金術士という職業についてのものもあったわけで…

錬金術については聞けば聞くほど凄い話だと思ったのだ。頭に思い浮かぶのは自分達を救ってくれた流星群、あんなものを人の手で

作り出せるなんて：錬金術って凄い！

何時しかトトリへの憧れは彼女が使う錬金術に向いていた。それには憧れの人が使っていたという付加価値も付いていたのだが、弟子入りして実際に錬金術を学んでみると、それ以上に自身が錬金術の魅力に取り付かれていったのだ。

そんな彼女の弟子入りがまるっきり押し掛け状態から始まった理由とは何だったのか。事の真相はこうである。

ルーフエスにトトリの所在を聞いてから即出発となるのは彼女の性格からは仕方ない、だが今はアールズに来たばかりで色々忙しいと彼に止められ諦めたのだ。彼女も彼の言い分は分かるのでしばらくはじっとしている事に。その間にだんだんと気持ちが高まり、ゴーサインを貰った瞬間、彼女はアトリエに突撃したのである。これが真相、まさにお預けをされた犬状態だったわけだ。

まずは落ち着かせるところから始めなければならなかったトトリが、話をする前に疲れてしまったのは言うまでもない。



結局、メルルちゃんの弟子入りの話は条件付きで受ける事になった。その条件は一月程錬金術を教えて、様子を見てから正式な弟子

にするかどうか決めるというもの。つまり、今は弟子（仮）状態だね。

まずは基礎の知識習得から初めて二十日目、メルちゃんは意外と出来がいい子だったので予定より早く終わり、今は錬金術の実技に移っている。

だけど、見ての通りこれが慣れないうちはなかなか難しい。杖でかき混ぜる速度や頻度、手応えなんかは経験が全てになってくる部分だ。ロロナ先生が錬金術を教えてくれた時に、やたらと抽象的な表現になってしまったのも頷ける。：あの人の場合は擬音ばかりで非常に難解だが。そのせいで生徒にはうまく教師役出来なかったのだろう。

ぐっとなってびゅーんとなってどかーんだよ！とか言われても、常人じゃ理解できないよロロナ先生：

私の場合は波長が合うのか、何となく分かるからよかった。そのせいか、やたら可愛がられたけど。

と、ロロナ先生の授業を受けたことのある私には人に教えるためのコツみたいなものが何となくだが分かっている。謀らずとも、先生が反面教師になっているわけだ。

私の目から見たメルちゃんは非常に教えがいのある生徒だった。言われたことはすぐに覚えてくるから、頭の出来は悪くない。想像力もあるみたいだし、ちょっと慌てん坊な部分は少し問題だが、それは慣れれば平気だろう。調合に関しては、未だ成功はないがすぐに感覚を掴んでくれるはずだ。

後は錬金術に対する確かな想いだけ。これがないとこの先やっていけないので、一番大切なことだ。

けれど…ふふ、どうやらこれも心配なさそうだけだね？

今も目の前で見事に調合を失敗して、次こそは！と気合いを入れているメルルちゃんの姿を見ると、大丈夫だなんて思うんだ。

だから…頑張ってね、メルルちゃん。

第3話 『トトリ先生の錬金術講座（前編）』（後書き）

次回はタイトル通りにトトリ先生の錬金術講座をお送りします。

第3話 『トトリ先生の錬金術講座（後編）』（前書き）

錬金術の話しには独自設定、独自解釈が含まれます。

第3話『トトリ先生の錬金術講座（後編）』

錬金術士っ！

第3話『トトリ先生の錬金術講座（後編）』

——三月三十一日

「今日は座学でこれまでの復習をします」

「はい！」

「まずは錬金術の歴史についてだよ」

今日も元氣なメルルちゃんとこれまでの復習をするためにも、これからは基本的な知識を教える座学の時間だ。

「錬金術は元々、遺跡から見つかった技術から生まれたんだっただすよね？」

「うん、その通りだよ。この大陸には今よりずっと昔に、今より遙かに発達した文明があったんだ。その跡地である遺跡から見つかった技術は、一部は錬金術として形を成し、一部は機械として形を成したんだ。どちらもアーランドを大きく発展させた技術だね」

「なるほど…錬金術ってそんな歴史があったんですね」

「まだまだ歴史が浅い技術だけだね。でも、ずっと昔からアーランドの発展に深く関わってきたからか、技術体系はしっかり熟成してるんだよ？ 当時は多くの錬金術士が生まれて、それぞれが様々な地方に錬金術を広めに旅立っていった歴史があるんだ」

「ほへー、ならアールズにも錬金術が伝わってきたのかな？」

「うーん、詳しくは分からないけど、たぶん伝わってきたと思うよ？ このアトリエにしたってきちんとした作りをしてるし…まあ、その辺りは今は気にしなくても平気だよ」

「…それもそうですね」

実はこの話、メルルちゃんに錬金術を教える事になった際、ルーフェスさんから詳しい話を聞いていた。

なんでも、メルルちゃんの叔母に当たる人が錬金術士だったらしく、その死の原因に錬金術が間接的に関わっていたせいで、メルルちゃんのお父さん——つまり国王が錬金術を苦手としているらしい。今回の錬金術士派遣についても少し思うところがあったようで、なかなか難しい顔をしているようだ。

なので、なるべくこの地に錬金術士がいたという事実には、彼女をふれさせないで欲しいと頼まれていたのだ。

そんなわけで話は先に進む。錬金術の基本知識はすでに理解できているので今日はそこから一步踏み込んだところ、材料のコストと特性についてだ。

「最初に錬金術は様々な材料を組み合わせで新しい物を作り出す技

術だって教えたよね？」

「はい、その事を調合って言うんですよね！」

「そうだね。実は錬金術に使う材料には様々な特徴があるんだ。例えば、火に強いだとか丈夫とか。目に見えないものだとか力や体力を増やしたりとかもあるんだよ？私達はそれを“特性”って言うんだけど、錬金術はこの特性を調合した物に引き継がせることが出来るの」

「えっ、じゃあ目的の特性を持った物を自由に作れるってことですか！？」

「そう、そこが錬金術の凄いところ。これを使って一種類のアイテムに様々なバリエーションを作り出せるんだ。錬金術の基本でもあり、また極めるまでには永い時が必要な技術だね」

「私なら便利な特性をいっぱい付けて最強のアイテムを作ります！」

「ふふふ、でもね？決して万能なわけではなくて、色々と制約もあるんだよ？」

「制約ですか？」

「そう、例えば調合品によって引き継げる特性が限定されていること。メルルちゃん、布に力を上げるイメージってありそう？」

「え、布にですか？うーん…ない、ですね。どっちかって言えば守りの力とか、身軽さとかの方がイメージ出来ます」

「うん、そうだよ。布にはそう言った防御面のイメージが強い。逆に武器の素材になる鉱石なんかは、力を上げたり特殊な効果を持たせたりとか出来るイメージがあるはずなんだ。これは実は正解で、各調合品にはイメージに沿った特性しか付加できない制約があるんだ」

「つまり、イメージに沿った特性を選べばいいってわけですね！」

「そういうこと。二つ目の制約としては、引き継げる特性の数と特性ごとに定められたコストがあるってこと」

「数とコスト？…数は何となく分かるけど、コストってなんですか？」

「コストは特性が持つ使用容量の量かな？材料にはそれぞれ潜在的に拡張領域があって、そこに特性を取り込んでいるんだ。もちろん調合で新しく作られた物にも当然それがあって、私達はそこに特性を取り込ませるの。その容量は決まっているわけだから、その範囲の中でしか特性を取り込ませられない。つまり、コストは取り込むために使う容量ってことだね」

この他にも、材料や調合品が持っている容量のこともコストと呼ぶ場合が多い。今後、表現的には此方の方が多くなるだろう。

特性にはその効果の強さによって消費コストが定められている。弱い効果には少ないコスト、強い効果には多くのコストがかかるわけだ。そのコストを合わせたものが、調合品のコストの中に収まらなければならない。つまり、強い特性ばかりには出来ないってことだ。加えて、拡張領域の関係から特性は五つまでしか持たせること

が出来ない。

だが、強力な特性を複数持つ品を作れないわけではない。

調合品が持つコストは調合に使用する材料の持つコストによって変化する。つまり、強力な特性を幾つも持った品を作るにはコストの高い材料を使えばいいのだ。

これを有効に活用して作り出した武器と衣服には、旅の間とてもお世話になったトトリである。

今でも新たな特性の発見や、その組み合わせによって生まれることがある新たな特性については研究段階であり、同時にそれは錬金術士の活動地域の拡大がある限り終わることがないだろう研究分野でもある。

「うー、よく考えないとうまくいかないってことかな…」

「錬金術は基本的に知識の有無が大きく関係してくるからね。そうだ！メルルちゃんには私が昔使ってた特性一覧表をあげるね？私のお古だけど、大半の特性が載ってるからきつと役に立つと思うよ」

「ほんとですか！？やったー！お古でも全然関係ないですよ！えへ、トトリ先生のお下がりがあ…」

「あはは、そこまで喜んでもらえるとなんだか照れるな…」

メルルちゃんに手渡したのは私が旅の合間に書き貯めたメモ帳。実際に特性を調べて書き足していった私直筆の物で、アーランドで発見された特性に関しては大半が載っている優れものだ。

そんな物を簡単にあげても大丈夫なのかと思われるかもしれない

が、これを書いたのは自分だ、内容に関しては全て頭に入っている。それに特性に関しては実際に付加して使ってみないと、その有効性は理解しづらいものが多いのでメモ帳はあくまでも資料止まりだ。

錬金術の基本は知識だけど、その後には経験だからね。自分で試行錯誤してみないと、一人前の錬金術士とは言えないんだよ？

「ちなみに、そこに書いてあるのはアールランドで確認されたものだけだから注意してね？アールズ特有の材料はまったく新しい特性を持っている可能性が高いから、新しい材料を見つけたらよく調べてみることに。これも錬金術の大切な基本だよ？」

「はい！」

「特性については自分でいろいろ試してみるといいよ。とにかく、実践。これが大切だからね。知識は後から付いてくるから大丈夫だよ」

「はい！よし！そうと分かればさっそく——」

「あ、ちょっと待ってメルルちゃん」

話を聞いたメルルちゃんがさっそく調査を始めようと錬金釜に向かうのをその場で引き止める。出鼻を挫かれて少し不満げな表情の彼女に苦笑しながら、こっちに帰って来てもらおうよう頼む。

「うー、何なんですかトリ先生ー、せっかくやる気満々だったのに……」

「ごめんね？でも大切なお話があるんだ」

「うー、大切なお話ですか？」

「そう、メルルちゃん。メルルちゃんを弟子（仮）にする時に条件を付けたこと、覚えてる？」

「（仮）って：は、はい、もちろん覚えてますよ？ 確か一月ほど教えてみて様子を見るって：あ、話ってもしかして」

「うん、実はメルルちゃんが弟子入りしてから明日でいたい一月が経つんだ。だから、そろそろ結果を報告しようかなって」

「ほ、ほんとですか！？ それで結果は！？ 結果はどうなんですか！？」

「こらこら慌てない、落ち着いてメルルちゃん。：結果は明日言うことにしてるんだ」

「えー、明日ー？ 今じゃダメなんですか？ 待ちきれないよー」

「ふふふ、でも明日でちょうど一月だからね。せっかくだから合わせてみようかなって」

「むー、確かにきりがいいけど：」

「あはは、今日も明日も大して変わらないよ。ほら、楽しみは明日に取っておいて、今は調合、調合」

「そう、ですね。明日なんてすぐですよ！ そうと決まれば、今は調合！ なんだかやる気が出てきたぞー！」

「うんうん、その調子だよ」

その後、何時にも増してやる気満々なメルルによって、アトリエに爆発の嵐が巻き起こったのは言うまでもない。

さてさて、メルルは無事トトリの弟子になれるのか？そして何より（仮）は取れるのか？

全ては明日、四月一日に動き出す。

——アーランド共和国との併合まで、あと五年。

第3話『トトリ先生の錬金術講座（後編）』（後書き）

話しの中であつた錬金術の歴史は私の想像です。詳しい歴史は調べても分からなかったので、ロロナのアトリエの話しを参考にさせてもらいました。ロロナのアトリエの中で、ロロナが活動拠点にしていたアトリエが遺跡から機械を復活させた旅人が開いたとあつたので、その時、その旅人が一緒に錬金術の根本に当たる技術も誕生させたのではないか？と思つたからです。

ですので、この話では旅人に頑張ってもらいました。

第4話 『王族の責務と始まる物語（前編）』 （前書き）

原作開始。

第4話『王族の責務と始まる物語（前編）』

錬金術士っ！

第4話『王族の責務と始まる物語（前編）』

古くから代々続く貴族や王族にはまず間違いなくいろいろな取り決めがある。成人するまでに何かをしなくてはならないとか、王を継ぐために必ず何かを成さなければならぬとか、まさに千差万別だ。

もちろん、それはアールズ王国にもあるわけで。

———四月一日

今日はメルルちゃんに弟子入りの結果を伝える日だ。

今から一月前、突然アトリエにやってきて弟子入り宣言をかましてくれた女の子で、実はお姫様なメルルちゃん。私は弟子（仮）として彼女を迎え、この一ヶ月、錬金術を教えてきた。

もちろん基礎から始めたので本格的な調合に入るのは時間がかかると思っていたが、彼女は期待を裏切り二十日ほどで基礎知識を一通り修得、実技である調合に足を踏み入れた。

まあ失敗ばかりで毎日爆発三昧なんだけどね。

懐かしいな：私も最初の頃は爆発ばかりだったよ。毎日部屋を煤だらけにしてはお姉ちゃんに怒られてたっけ。部屋を掃除するのはお姉ちゃんだったしね。

なんだかんだ言っても何時も綺麗に掃除してくれて、それが申し訳なくて一刻も早くコツを掴まなきゃって一層気合いが入ったんだっただな：

それから少ししてコツを掴んでからは爆発の頻度も減っていき、自分の実力に見合ったレシピかどうかも判断出来るようになった頃には、爆発とは無縁になったんだよね。

お姉ちゃんは私をかまう口実が無くなって残念だったみたいだけど。

まったく、お姉ちゃんってば：、：そんなのいつでもいいのに。

私がそうだったように、メルルちゃんも何か切っ掛けがあればコツを掴めると思うんだけど：

一度感覚を掴めば後はそれが自然と身に付いていくから安心出来る。今回の弟子入り条件だって、一度でもその感覚が掴めればいいなって程度なんだよ。

なにも調査に成功しろって言ってるわけじゃない、その感覚を少しでも味わってもらえればと思っただけ。

そもそもが、最大の条件である鍊金術に対する確かな想いって部分は、この一月のメルルちゃんの様子を見てたら問題なさそうだからね。

そう言った意味では、弟子入り条件は既にクリアしてるんだよ。

だから後は錬金術士として一步を踏み出せばって期待してる。
メルルちゃんならやってくれると信じてるよ。それにメルルちゃん
のことは気に入ってるしね。良い子だし、何時も一生懸命なのは
好感が持てる。

だから、ちょっとしたサービスくらいしてもいいよね？

私はコンテナから材料を取り出して来て、それを錬金釜にゆつくと沈める。メルルちゃんが来るだろう時刻を考えると今から始めたら調度いいだろう。

作るのとは一番初歩の中和剤、何時もは短縮して作っていたものを今回は普通に作る。これなら、メルルちゃんが来る頃には調合も大詰めになっているはずだ。

さて、ある程度調合を済ませて完成間近の状態にしたら、後はこれを放置しておく。それから自分はソファアーに移動して狸寝入り。

そう、私のちょっとしたサービスとは完成間近の状態に触れさせること。これでたぶん何らかの手応えは掴んでくれるはずだ。

問題はどうかやって自然に錬金釜に触れさせるかだったのだけど：メルルちゃんのことだから、私が寝てると分かれば気になって手を出してしまうに違いない。その辺は短い付き合いでも分かる。思い立ったらすぐ実行、行動力が無駄にあるからね、メルルちゃんって。

ふわあ……ん、なんだか本当に眠くなってきた、……まあ、誰か来たら気配で分かると思うし、少し寝ちゃおうかな？

もうすぐルーフエスさんから錬金術を用いた発展計画が国王宛に提出されるはずだし。そうしたら、ゆっくり居眠りなんてしてられないだろうしな……

だから、今は居眠り。

……別に悪くないよね？



トトリがコックンコックンと船を漕いでいた頃、城の中には辺りを気にした様子でこそそと動き回るピンク色の物体があった。城に配備された警備兵の目を盗んで、今から城を抜け出そうとしていたメルルだ。

そんな彼女が一番注意しないといけない相手、それは――

「姫様、お目覚めになられておりますか？今日の予定は午前中に算術と歴史の講義、午後は……姫様……？」

そう、完璧執事こと、ルーフエスその人だ。なんと彼は今や国政だけには止まらず、次期王位継承者の教育まで担当していたのだ。はつきり言って彼の存在がアールズ王国を支えていると言っても過言ではない。

ルーフェスが部屋の前でノックしているのを確認した後、すぐさまメルルはその場から立ち去る。これでしばらくは足止め出来るだろうと安易な考えだった。

「はあ…、またお逃げになったのですか…、行き先は恐らく…、…はあ、デジエ様が知ったらお嘆きになられるぞ」

最近姫様が頻繁に通うようになった場所を思い浮かべて頭を抱える。

彼はメルルの弟子入りの件については全て知っていた。もう一人の当事者であるトトリとは発展計画について相談するために、ここ一月ほど頻繁に顔を合わせていたからだ。

実はトトリがその時、彼に話していたのだ。さすがに一国の姫君を勝手に弟子入りさせて良かったのか、それを聞いたかったからである。

ルーフェスも最初は姫様の何時もの気紛れだと思って静観していた。すぐにあきるだろうと。だが、予想に反してメルルはそれになんて中になっていったのだ。

ここで困ったのは、彼女の父親であるデジエがそれを知らないこと。今は隠し通せているが何時知られるとも分らない。

これからのアールズ王国の発展には錬金術士の存在が必要不可欠だと考えているので、個人的には彼女が錬金術を学ぶことには賛成の彼だ。なんとか国王の理解を得たいとも思っている。

それになんだかんだ言って彼もメルルには甘いのだ。今もこうして見逃しているのがその証拠。

「…はあ、姫様のことですから大喜びでお伝えに行かれるのだろう」

彼は昨日トトリから弟子入りの結果についてを知らされていたので、事が国王に知られるのも秒読み段階だと分かっていた。

（…姫様の意志次第では説得の方法を考えておく必要があるな。）

やはり彼女には甘い彼だった。

新たな問題に頭を悩ませながらも、来た時と変わらない冷静沈着な姿に戻った彼は早々にその場を後にしたのだった。



「…ふう、脱出成功ッ！お城でじつとなんてしてられないもんね！今日は私にとって大切な日なんだから！」

メルルは城門の外から城を見上げて自慢げに声を上げた。ちなみに、城から抜け出す時の様子は実に慣れた手際だったと言っておう。

そのまま城に背を向け城下街に向けて足を進める。街までは簡単に整備された並木道を抜けてすぐだ。

城に比べれば小さめな石造りの門を潜ると、そこにはアールズの日常が営まれていた。

メルルはそれを笑顔で見渡しながら職人通りと呼ばれる街の中心部に足を踏み入れる。

「あ、姫様だ！姫様おはよう！」

「うん、おはよう！」

「おはようございます、姫様。先日は娘と遊んでいたいただいたようで、ありがとうございます。娘もとても喜んでいました」

「おはよう。気にしないで、私も楽しかったから」

「メルルちゃん、今日も元気一杯だねえ！どうだい！新しい品が入ったんだ見ていかねえか！」

「あはは、ごめんね？今は用事があるから、また今度にして！」

「おや、メルルちゃん、また城を抜け出してきたのかい？ルーフエス様も大変だねえ」

「あはは…、ルーフエスには秘密にしておいてね？」

彼女は街の人気者だ。移動する度に多くの人に声をかけられる。その都度、嫌な顔一つしないでそれに応えていく姿は非常に好感が持てて、そのため彼女の人気は衰えを知らない。

デジエ王も国民と距離が近い人だったが、娘のメルルはそれに輪をかけて近く、国民もそんな姿がアールズらしいと気に入っている

のだ。

予想以上に時間を取られてしまったがようやく職人通りを抜けて並木通りに。ここは開拓事業のために設けられた場所で、建物が点々とあるだけだから呼び止められる心配もない。一気に突き抜けて街の外れを目指す。

街に沿って流れる大河をさかのぼった先に目的の場所がある。ほら、見えてきた。大きな煙突に水車と栗の木、私がこの一月お世話になっているトトリ先生のアトリエだ。

はやる気持ちを押さえきれずに、勢いそのままに飛び込む。

「トトリ先生ー！おはようございまーす！メルルです！いらっしやいますかー！」

……あれ？何時もならすぐに返事が返ってくるはずなのに、おかしいな？そう思いながら中を見渡すと、ソファーに座っているトトリ先生を見つけた。でも、何か様子が変わる。

「トトリ先生？…あ、眠ってる…？」

近くまで寄ってみたら先生が寝てた。うわ、珍しい。しかも、練金釜の様子を見るに、調合中に居眠りしてしまったようだ。今まで先生のこんな姿見たことなかったから凄い新鮮だ。

やっぱり、トトリ先生でもこんなことはあるんだ……ちょっと安心した。

はぁ、それにしても…

「…うわ、やっぱり先生って可愛いな」

先生の寝顔なんて初めて見たけど、普段は見られない幼い部分が表れているのか、子供みたいに安らかな顔ですっごい可愛かった。何時もの大人っぽい顔付きもいいけど、この顔もなかなか…

「うわぁ、ほっぺもモチモチしてる…」

眠っている先生の頬をつついてみると、きめ細かくて瑞々しい肌が指を押し返してくる。う、なんか癖になりそうな柔らかさ…

「んん…」

「ひゃ!？」

び、びっくりした!お、起きてないよね?……ふう、大丈夫みたい。だけど、これ以上やると起きちゃうかも。……で、でも、もうちょっとだけ…

「…ん、んん…」

「はう…」

う、なんだ変な気分になってきちゃったかも。はぁ、トトリ先生え…、…はっ!? ダメダメ!なんかこのままじやまずい気がするよー!

真っ赤になって、いつの間にか近付いていた顔を慌てて離す。先生から目をそらし、胸に手を当てて呼吸を整える。

すう…、はあ…、うう、まだバクバクしてるよお。

なぜか、まともに先生の顔が見れない。き、気まずい…な、なにか気をそらせるものは…

「あ、練金釜…」

そうだ！先生が居眠り中なら誰かが様子を見ておかないとまずいよね！？うん、そうだ、そうに違いない。それに先生が何を作ったのかも気になるしね！

眠っている先生を起こさないよう静かに離れて、練金釜に近付いて中を覗き込んでみる。む、やっぱり調合途中だと見た目みんな同じだから分かんないな。あ、でも、もう少しで完成しそうってことは分かるよ？いままで何回も調合してきたし…ま、まあ失敗ばかりだったけど。あははは…

「うーん、もっと混ぜた方がいいんじゃないかな？」

なんとなく、もっと混ぜればいいような気がして練金釜に備え付けられた杖を手取る。

「えーと、確かこうだったよね？ぐるぐるーっと」

杖を両手で持って勢いよく混ぜる。お、なんか初めての感覚。よしと気合いを入れて、中心部に円を書くようにひたすらかき回す。

———ぶくぶくぶく

「あ、あれ？　なんだか様子が…、お、おかしいな？　そうだ、もつと混ぜてみれば…」

———ぶく、ぶくぶくぶく、ゴボッ

「うわああ！？　なんか凄いことになってる！　ど、どうしたらいいのー！？」

いつの間にか練金釜の反応が凄まじいことになっていた。混ぜ始めた時は小さな気泡が気になるくらいだったのに、今はなんか大きな気泡がゴボゴボいつている。

断言しよう、絶対これは成功なんかじゃない！

うわーん、よけいなことしなきゃ良かったよー！

「…ふあ、ん、…はれ？　メルルちゃん…？」

「ト、トトリ先生！？　こ、これは、違うんです！　アトリエに来たら先生が寝てて、でも調合途中みたいで…ちよっと気になって、それ

であの、えと…」

ま、まずいよ！？先生が寝てる間に勝手に調合途中の釜をいじっちゃったなんて、しかも、それを台無しにしちゃっただなんて、何を言われてもおかしくないよー！

目を回しながら言い訳を言おうとして、やっぱり口に出ず、あうあうなんて言いながら手に持つ杖を今まで以上に動かしてしまう。そんなことしたら当然こうなるわけで…

————ゴボツゴボゴボ

「ッ！メルルちゃん！そんな混ぜ方じゃ——」

————ドカアアアアンツ！！

結果、駆け寄ってきたトトリ先生ごと私達は煤まみれになったのだった。

「けほっ、けほけほ、あう、爆発しちゃった…」

「こほっ、そ、そんな混ぜ方じゃダメだよ…」

うう、ごめんなさい！

第4話『王族の責務と始まる物語（前編）』（後書き）

まず言っておきます、メルルは百合ではありません。その手の知識はまだまだなので、トトリの寝顔にちよっとときめいちゃっただけです。

さて、爆発ばかりのメルルですが、これは当たり前。常人が錬金術をマスターするのは至難の業だと思っんです。調合ってほとんど杖から伝わる感覚だけで行うので、やって覚えるの極みでしょう。しかも上位のアイテムを作るのにはそれが数日続くとか、まさに職人芸ですよ。

たった5年でそこまでいける主人公達って本当にスペック高いですよね。

第4話 『王族の責務と始まる物語（後編）』（前書き）

新キャラ登場。

第4話『王族の責務と始まる物語（後編）』

錬金術士っ！

第4話『王族の責務と始まる物語（後編）』

調合失敗時の爆発に巻き込まれ二人して煤まみれな私達だったけど、ひとまず簡単な換気を行ったことで一息つけた。

「うう、ごめんなさいトトリ先生…、調合品ダメにしちゃって…」

「メルルちゃん、あんな風にかき混ぜちゃダメ。もっと材料が溶け合って、それを別の形に変えていくようなイメージでゆっくりとかき混ぜないと」

「…お、怒ってないんですか？」

「うん、怒ってなんかいないよ。それより、今は掴んだ感覚が生きてるうちにもう一回、やってみよう？ 失敗した経験を生かさなきゃね？」

メルルちゃんが不安そうにこちらを見てきたけど、私は本当に怒ってなんていない。そもそも、私が仕組んだことなんだし。

今までの様子からそう簡単に成功するとは思っていなかったからね。爆発も…まあ、想定範囲内だ。

今はそれより、完成間近の感覚を忘れないうちに、実際に調合してみないとダメだ。

私はメルルちゃんに調合の感覚をなるべく具体的に表現して話しながら、コンテナから取り出した新しい材料を練金釜に入れていく。

「さ、今の感覚を忘れないで…、ゆっくり、イメージが大事だよ？」

「わ、わかりました。やってみます」

メルルちゃんを練金釜に向けさせて、再チャレンジ。今度は私も側で簡単なアドバイスをしながらその様子を見守る。

ぐるぐる、ぐるぐる。

うん、この調子なら今度はうまくいくはずだね。やっぱり、完成間近の状態に触れさせたのはプラスに働いたみたい。しっかり、調子の状態に合わせられてる。

「…で、でき…た…？」

それから数時間後、見事、調合に成功したメルルの姿があった。ちなみに、その結果に一番驚いていたのは当の本人だった。

固まってしまった彼女の横から身を乗り出し、釜の中から中身を取り出して確認。うん、大丈夫かな。未だ固まったままのメルルちゃんに調合は成功したのだと告げた。

「成功…、ほんとに成功ですか!？」

「うん、ちゃんと調合出来てる。これなら、文句なしに合格だよ」

「やったあ！って、あれ？合格…、合格？」

「うん、実はメルちゃんの子入りのお話ね、もう合格にしてもいいかなって思ってたんだ。最初はいきなり弟子入りしたいだなんて言われて困ったんだけど、錬金術を学びたいってその気持ちが嘘じゃないって分かったし、何より本当に錬金術が好きで、頑張ってるって気持ちがあるのかを確かめたかっただけなんだよ」

「なるほど…、でも、こんなあっさり、錬金術士になれていいんですか？」

「もちろん、一人前にはまだまだ覚えなくちゃならないことはたくさんあるよ？でも、まずは第一歩。おめでとう、メルちゃん」

「ありがとうございます！でも、そっかー、そんなに甘くはないですよね…、でもこれで、私も錬金術士！皆びっくりするだろうな」

「ふふ、それじゃ改めて、あめでどう。これからよろしくね、錬金術士さん？」

「はい！頑張ってるトトリ先生みたいな立派な錬金術士になってみせます！トトリ先生、これからもよろしくお願いします！」

「えっと、その先生って呼び方はやっぱり慣れないかな…？」

「えー、先生は先生ですよ。私の先生！」

「あはは…、ロロナ先生もこんな気持ちだったのかな…」

先生、先生と、いかにも尊敬していますといった目を向けてくるメルルちゃん。なんだか、むずかゆくて一月経っても未だに慣れない。

先生か…冒険者になったあの日からずいぶん経ったんだなあと、時間の流れをしみじみ感じる。

短い間だったけど、メルルちゃんの成長を間近で見えてきて、なんとなくロロナ先生が私に向けてた表情の意味が分かった気がする。あれって教え子の成長が嬉しかったんだね。

たまに表情が崩れていたのは、よほど嬉しかったからなんだろう。私に教えていた時が、初めてまともに先生出来ていたらしいから。

…その後の教師人生は真っ暗だったけど…、あはは…、と、とにかく！

メルルちゃん、一人前の錬金術士を目指して、まずは基本の復習だよ！



完成した中和剤をひとまずコンテナにしまい、私とメルルちゃんは錬金術の基礎知識の書かれた真新しい教本を取り出す。

基礎の基礎から書かれているこの教本は錬金術を学ぶ者が必ず手に取る有名な本である。もちろん、私やロロナ先生も擦り切れるま

で読み返したものだ。

ちなみに、その本は未だに大切な思い出として大切に保管してある。

「まずは基礎からもう一度復習していこうね？」

「はい！」

「うん、いい返事。じゃあ、まずは…」

———トントン

ページを捲って、いざ復習開始！と教本に目を向けた瞬間、来客を知らせるノック音がした。

メルルちゃんと顔を合わせて突然の来客に首を傾げる。
城の人かな？ 思い当たる人はそんなにいないけど…

「失礼します。姫様、やっぱりここでしたか」

「ケイナ！」

現れたメイド服の少女にメルルちゃんが嬉しそうに駆け寄って行く。それを見て此方も嬉しそうに頬を緩めるメイド少女。

彼女の名前はケイナ・スウェーヤ。

メルルちゃんに仕えるメイドで、彼女の幼馴染。アールズに到着したあの日、森で魔物に襲われていた二人の少女の内の一人だ。

姫とメイドといった立場の二人だけど凄く仲がよくて、少し前にメルルちゃんから私の大親友だと改めて紹介されたのだ。

そんな彼女だけど、幼い頃からメルルちゃんには随分振り回されてきたらしい。初めて会った時も、彼女を一人にするのが心配で付いてきて、あんな状況に巻き込まれたのだと言うし。

話を聞いていたらなんだか心配になってきたので、護身用に魔物にも効く催眠薬の入った小瓶を渡しておいた。使い方は瓶ごと相手に投げつけるだけの簡単使用。薬品に詳しい彼女なら、うまく使ってくれるだろう。

「タオルと、着替えを持ってきました。どうぞ、お顔を洗ってこちらの服にお召し替えください」

「服？べ、別に汚れてなんていないと思うけど…」

「ダメです。あのルーフェスさんが見落と思ってるんですか？姫様、もしここにすることがバレてしまったら大変ですよ？」

「う…、確かに…」

「ですからきちんと身なりは整えませんか…」

「うう…、お説教フルコースだね…、分かった、着替えるよ」

メルルちゃんは過去に受けたのだろうルーフェスさんからのお説教を頭に浮かべたのか、もの凄く嫌そうな表情を浮かべながらも着

替えに賛成した。

その場でいそいそと服を脱ぎ始めるメルルちゃんと、それを当たり前のように手伝うケイナちゃん。

あ、お水はその桶にあるよ。

ううん、気にしないで？また汲んでくるから。

…く、直に見ると予想以上に大きいじゃないか…！嫌みか！私に對する嫌みなのか！？

…って、メルルちゃん！何当たり前のように平然と着替えてるの！？人前なんだよ！？

え、先生しかいないから大丈夫？自分は気にしない？いや、メルルちゃんが気にしないなら…、女同士だし…、…いいのかな？…うん。

「姫様、両腕をあげてください。コルセットをおつけします」

「はい。…これでいいかな？」

「もうちょっと右…、けっこうです。では留め具をおつけしますね」

「…ねえメルルちゃん、いつも着替え手伝ってもらってるの？」

「はい。小さい頃からずっとですけど、何か…？」

「う、ううん、何でもないよ」

「そうですか？」

コルセットを絞めて、長袖のパーツを取り付けているメルルちゃんに不思議そうな顔を向けられて、少し言葉につっかえながらも返事を返す。

視線を戻して着替えを再開するメルルちゃんをぼんやりと眺めながら考える。

うーん、お姫様なんだし…、普通なのかな？あ、確か記憶の中にもお姫様のイメージがあったような…、うわ、うわわ！けっこう色んなイメージがあるんだ…、でもやっぱりお姫様って着替えも手伝ってもらうんだね…

と、私が久々に前世の記憶まで持ち出して考えている間に、メルルちゃんの着替えも終わったみたい。

それから話はケイナちゃんがここにやってきた理由へと移る。どうやら城を抜け出したのに気付いたルーフェスさんに言われて探していたらしい。

この場所だと確信したのは今朝のメルルちゃんの様子を見れば一目瞭然だったらしい。さすが幼馴染だなと感心していると、メルルのことは何でも知っていますからと微笑んでくれました。

その後、名前を呼び合ってお互いの仲の良さをアピールしてくれ

た二人だったけど、メルルちゃんが一度お城に帰ろうと言ったケイナちゃんに反対して、結果、ため息ながらそれを認めた彼女を見学に加えて中断してた講義を再開することとなった。

そういったわけで、今は錬金術士になったということ、今まで詳しく説明していなかったフィールドワークに関しての話をしている。

「錬金術士は、まず初めにしなくてはならないことがあるの。それは様々な土地に足を運び、調合の材料となる素材を集める”採取”だよ。採取では魔物と戦ったり、未知の場所を探索したりすることもある。とっても大切なお仕事なんだよ」

「おおー！なんだか凄く面白そう！分かりました！私、それやりますっ！」

「待ってください。ダメですよメルル！街の外に出るだなんて…、そんな危険なこと！それほど強くないとはいえ、街の外に出たら、この辺りにも魔物はいるんですから。以前の事を忘れたんですか？ トトリ様が助けてくださらなかったらどうなっていたか…」

「う、わ、分かってるよー。でも今度は深入りしないよう気をつけるし、だから大丈夫だって！」

「そういう話では…。メルル、まったく、言い出したら聞かないんだから。トトリ様からも、何とか言っていただけませんか？ どうか？ まだ、早くありませんか？」

「うーん、採取は錬金術の基本だし、出来ればやって欲しいけど…、

私達が初めて会ったあの森なら、奥に行かなければ平気だと思うし」

「ほら、トトリ先生もこう言ってることだし。確かにあそこなら奥の方に行かなきゃ、魔物も全然平気だって。それに、錬金術士には勇気も必要だしね！」

「勇気と無謀は違います。ですが…、仕方ありませんね。では、私もお供します。それが街の外に出る条件です」

「ええー。でも、ケイナなんてぶにの手くらいにしか役に立たないしなー」

「それがいいんです。そうしたら、無茶なことなんてしないでしょ？ 私がいっしょに見張ってますから。私のこと、ちゃんと守ってくださいね？」

話し合いの結果は、ケイナちゃんの押しに負けたメルルちゃんが彼女の同行を認める形に落ち着いた。

ケイナちゃんはその時のことがあってか、メルルちゃんに対して少し強めの態度を取るようになったらしい。

メルルちゃんの無茶な行動を止められなかったことを後悔しているのだという。それで、一番近くにいた自分がいっしょになくては、と慣れないながらも頑張っているようだ。

：何だかんだ言って認めている辺り、メルルちゃんの性格を理解した上で説得をあきらめて、側で注意を促す立場になることにしたみたいけど。

「それじゃあトトリ先生、採取、行ってきますっ！」

「うん、気をつけてね？行ったらっしやい」

「メルル、待ってください。もう、落ち着きがないんだから…。では、トトリ様、私も失礼します。…メルルー、待ってください！一人はダメだと言ったでしょう！」

「あはは…、ほんとに大変そうだね…」



あつという間に飛び出していった二人を見送った後は、アトリエの掃除を簡単に行い、昼食を取るために酒場に向かう。

酒場は並木通りにある開拓事業用の施設だ。ここではアールランドからの人員をそれぞれの仕事に振り分ける仕事が行われている。

開拓事業用だけと言ったわけではなく、アールズの人達向けに簡単な食事所としても公開されているので、昼時は冒険者や派遣員に混じってアールズの人達がそれなりに見られる。

メルルちゃんが私のことを話していたのか、ここに来ているアールズの人達にはよく話しかけられる。

此方としても、これから五年間お世話になる人達である。

メルルちゃんのことを緩衝材になったのか、それともアールズの国民が皆優しい気質なのか、アールズに来てからまだ日が浅いながらも、お互い友好的な雰囲気を作り出せていると思う。

「あ、トトリちゃん…」

テーブルを囲って談笑していた知り合いに簡単な挨拶をされつつも、それに対応しながら空いてる席を探す。

少し時間をおいて来たはずだけど、まだけっこう混雑している。あ、あっちの方が空いてるかな？

「ト、トトリちゃんっ！」

「うわあ！あ、フィリーさんか…、脅かさないでよ…」

「ひ、ひどいよトトリちゃん。私のこと一月もほっといたくせに…」

「あ、あはは…、ごめんね？いろいろあって来れなかったんだ」

「うう、確かにトトリちゃんのお仕事は大変だって分かってるけど…、たまには顔を出して欲しかったよー」

このちよつと情けない感じの女性の名前はフィリー・エアハルトさん。私が冒険者になった時からの付き合いで、今回のアールズ派遣にはクーデリアさんの強い薦めで参加することになった人だ。

アールズではクーデリアさんを上司に持つ冒険者ギルドの受付係だった彼女は、見ての通りちよつと頼りないけど、仕事の覚えはよかったため、今では立派な受付嬢。そこを買われてのアールズ派遣らしい。

「あ、そうだ。もう少しで依頼関係の準備が終わるから、その時はよろしくね?」

「依頼…、ギルドと同じ感覚でいいんだよね?」

「うん、基本的にはね。ただ、ギルドとは違って、収納期限をあまり厳しく定められないようにしてあるから、時間のある時にまとめて受注することも可能だよ。ただし、一度受けたものは必ず達成してね」

「そこはギルドと同じだね。でも、期限が長いのは助かるかな。…うん、分かったよ。時間のある時、顔を出すね」

「ありがとートリちゃん、これで依頼関係も一安心だよ!」

「あはは、大げさだよ」

それからちようど仕事がお昼休みだというフィリーさんと一緒に昼食をとって、軽い雑談を交わしてから酒場を後にした。



ちよつとした買い出しを終えてアトリエに帰ってきたら、メルルちゃん達が帰ってくるまでは自由時間。

研究ノートを取り出して書き始める。うーん、やっぱりこちら辺には新しい特性があるみたいなんだけど：

街の外で活動している知り合いの派遣団員にお土産と渡された素材。

メルルちゃんの件があったから、まとまった時間が取れずに詳しい効果までは調べられていないが、アーランドでは見たことがない特性を示した。

これには私の胸も高鳴る。

これだよ、これ！私はこれを待ってたんだ！

正直、テンション上がりまくりだ。だけど、メルルちゃんが何時来るか分からない現状では、下手にアトリエを離れられない。以前はそれで床に手を突いたけど、彼女が錬金術士として一步を踏み出した今なら違う！

これからは少しの間なら目を離しても大丈夫だし、採取に関しても都合が合えば同伴できるのだ。

そうなれば、新しい素材や新しい特性と出会える。ふふ、錬金術士としてこんなに楽しみなことはないよ。

でも、ひとまず今は、この渡された素材で我慢しよう。



メルルちゃん達が帰ってきた。だけど、なぜかご立腹だ。詳しい話を聞いてみると、採取から帰ってきたところでルーフエスさんに捕まってデジエ王の前に連れて行かれたらしい。その時にデジエ王に対して錬金術士になったと話したら、猛反対されたらしいのだ。結局、いろいろと言われて、ついカッとなって飛び出してきてしまったのだという。

話をまとめると、こんなところだろう。

「それにしても、王族の責務か…」

王族の責務。今回の話に出てきたアールズ王族の重要な使命だ。内容は国を導き、発展させ、国に住む者を豊かにすること。つまり、より良い王様になりなさいってことだね。なんだか、この国が優しい理由が分かった気がするよ。

「先生…、錬金術を学ぶことをお父様を認めさせる方法って、何かありませんか？」

「そうだなあ錬金術が国の発展に役立つことを証明したら…、認めてくれるんじゃないかな？」

「あ、そうか！…でも、どうやって証明したらいいんだろ…？」

「うーん、ルーフエスさんに相談してみたらどうかな？あの人なら、何か知恵を貸してくれると思うけど…」

「うええ、ルーフエス？確かにルーフエスなら、何か方法を知っ

てると思うけど…、やだなあ今は会いたくないよー」

よほどルーフェスさんに会うのが嫌なのか、私特製の実寸代ぷにクッションを抱きしめてソファの上で丸まるメルルちゃん。

ちなみに、この実寸代ぷにクッションはぷに玉で作られているので、ぷにぷに触感でひんやりと冷たい。夏場では大変お世話になる素敵アイテムだ。

結局その日、メルルちゃんは城に帰りたくない駄々をこねて、アトリエに泊まることになった。

ケイナちゃんが城に連絡を入れるために帰った後は、二人で夕食をとってから錬金術の勉強を簡単にやって、早めに就寝。

メルルちゃんがベッドを使い、私は慣れているのでソファを使うことにした。ぷにクッションは抱き枕にもなるのだ。さすが、ぷにクッション。こだわって作っただけの事はあるね。

それにしても、王族の責務か…。やっぱりルーフェスさんに相談してみるしかないよね？あの人なら案外簡単に解決方法を考え出してくれるかもしれないし。…うん、そうしよう。

———明日はルーフェスさんのところに顔を出そう。

ぷにクッションを両手で抱きしめてそう思いながら、私は眠りについたのであった。

第4話『王族の責務と始まる物語（後編）』（後書き）

メルルの無鉄砲さはあれくらいでは変わりません。ですので、ケイナは今までより少し押し強い子になってもらいました。まあ、メルルに甘い部分は変わらないのでそこまでの変化はありませんが。あと地味に登場したフリーですが、トトリとは友人関係です。そして、初のオリジナルアイテム、ぷにクッション。あのフォルム、絶対製品化するだろうってことで出しちゃいました。今後も出番があるかも…？

第5話 『錬金術の活用法と初めての依頼』（前書き）

依頼の背景については作者の独自解釈が含まれることがあります。

第5話『錬金術の活用法と初めての依頼』

錬金術士っ！

第5話『錬金術の活用法と初めての依頼』

———四月二日

今日はルーフェスさんに会うために朝からアールズ城まで来た。ちなみに、メルルちゃんは昨日いろいろあったせいか、まだ眠っていたのでアトリエに残してきた。

「それで、何か方法はないでしょうか？」

「そうですね。ないわけではありませんが…」

ルーフェスさんが考えた方法は、メルルちゃんを錬金術士としての国の開拓事業に参加させると言ったものだった。これなら既に私との打ち合わせで計画案が出来上がっているので、デジエ王の説得が今すぐ行える。

それに、これにはメルルちゃんの将来に役立つプラス要素も目立つ。

国の発展に主だって関わることによって、王族としての自覚や愛国心も強くなるだろうし、それを見ている国民の人気も上がる。

国外に対してもメルルちゃんの実力を認めさせ、ある程度の自由意志を持つ存在だと認知させられる。

「これならば、王族の責務と錬金術を結びつけられます。トトリ様申しわけありませんが、今回の開拓事業の件、姫様のサポートに回っていただけませんか？」

「うーん、私としても派遣されたからには、何かしらの成果を上げなければならぬんですが…」

「それは此方としても存じております。もちろん、錬金術士としてまだまだ実力の足りない姫様ですので、実際の仕事ではトトリ様のお力を借りることになる場合が多くなるでしょう。アーランドへの報告はこちらからさせていただくので、トトリ様、どうか姫様のためにお力を貸していただませんか？」

「……分かりました。メルルちゃんのサポートは私に任せてください。今後のことを考えるとこれが一番でしょうし、弟子の面倒を見るのは先生の仕事ですから」

話し合いは、私の錬金術士としてのお仕事をメルルちゃんに肩代わりさせることで決まり、終わりを迎えた。

私のメリットとして何があるかと言えば、私はそのサポート役ということで、これからは活動の範囲を広げられることだろう。サポート役なら、積極的に採取や開拓に参加できるしね。

アーランドに報告するのもルーフェスさんがやってくれるそうなので、私としては大助かりだ。今回の件は面倒な説明になりそうだし。

さてと、話がまとまったことだし、アトリエに戻ろうかな。

あ、なんですかルーフエスさん？

え、メルルちゃんを？

はい、分かりました。

では、そのように言っておきますね。

帰り際にルーフエスさんから、メルルちゃんに自分のところまで来るように言ってくれないかと頼まれた。

結局のところ、メルルちゃんの問題なので人伝より自分の耳で聞いた方がいいよね。そう思ったので、帰ってからすぐメルルちゃんにルーフエスさんが呼んでいたと伝えることに決める。

それから、城を出る時にケイナちゃんと出会ったので一緒にアトリエに向かうことに。以前渡したねむり薬についてお礼を言われる。役だったみたいでよかったよ。話ついでにと、そのまま追加の注文を受けた。

あ、これ地味に初めての依頼だ。



アトリエに帰ってくると時刻は既にお昼前、メルルちゃんは予想通り寝ていた。ケイナちゃんがため息をついて起こしに行くのを見てから、私は練金釜に火を入れに向かう。

「ふぁー、トトリ先生…、おはようございます…」

「うん、おはようメルルちゃん」

起きてきたメルルちゃんと三人で昼食をとりながら、彼女にルーフェスさんと会ってきたことを伝える。期待したように結果を聞いてくる彼女に詳しいことは話さず、代わりにルーフェスさんが直接顔を出せと言ったことを話した。

「う、そうだね…、私が行かなきゃ話が始まらないよね？トトリ先生、私、ルーフェスに会ってきます」

「うん、よく話し合ってみるといいよ」

メルルちゃんは身支度を整えるとすぐにケイナちゃんを連れてアトリエを飛び出していった。

あとはルーフェスさんに任せれば大丈夫だろう。うまくデジエ王を説得してくるんだよ、メルルちゃん。

さて、私はサポート役の話について派遣団の皆に伝えに行かないと。

錬金釜の火はそのままにして、酒場に向かう準備をする。あそこなら誰かしら待機しているはずだから、すぐに用も済むだろう。

メルルちゃんが戻ってくる前に、早く用事を終わらせて帰ってこ

ないよね。

二時間後、酒場で待機していた派遣団の責任者に話を伝えてアトリエに戻ってきた。

どうやら、メルルちゃんはまだ戻ってはいないようだ。説得自体はルーフェスさんも協力してくれるので失敗はしないはず、たぶん今頃は彼から錬金術を用いた発展計画についての詳しい話を聞いているのだろう。

私が協力して、いくつか意見を入れた計画だ。

まあ、言ったことは国の発展具合を分かりやすくランクに分けてみては？とか、そのランクによって錬金術の参考書を渡してみても？などといった内容だけだ。

目に見えて分かる評価は本人のモチベーションアップにも繋がるからね。参考書についても現状の錬金術の腕前がランクで分かるから、新しいものを渡すタイミングが掴める。

ちなみに、この方法は前世の知識から出たものだ。

やっぱり前世の記憶って、こんな時には役に立つよねー

と、回想しているうちにメルルちゃんが帰ってきたみたいだ。ケイナちゃんは仕事があるとのこと、城で分かれたらしく一緒にはいなかった。

ふむふむ、どうやら説得はうまくいったらしい。メルルちゃんが

ニコニコしながら、ことの結末を話してくれた。

「それでモヨリの森の兵士の皆に食べ物を届けることになったんです。トトリ先生、何かないですか？」

「そうだな…、なら錬金術で作ったパイなんかどうかな？」

「パ、パイですか？」

「うん、簡単に調合できるし、一度にたくさん作れるからね。時間もそれほどかからないから、今から作っても夕方までにはかなりの数を作れると思うよ？」

「錬金術で作ったパイか…、どんな味がするんだろ？」

「あはは、やっぱり気になるよね？大丈夫、普通のものと変わらないよ。錬金術で作ると、途中の行程を省けるだけ」

「え、そうなんですか？意外だなー、錬金術を使うならすっごい美味しいパイを作れそうなのに…」

「うーん、出来ないことはないと思うんだけど…、やっぱり餅は餅屋だよ」

「もち…あの、先生、それってどういう意味なんですか？」

「あ、そっか…、こっちにはない言葉だったよね。えっと、つまり、パイはパイ職人が作ったものが一番美味しいってことだよ」

「へー、そんな意味があるんだー」

自然と口に出てしまった言葉を誤魔化しながら、手作りパイの作り方が書かれたレシピ本――はじめての参考書をメルルちゃんに手渡す。

この参考書には中和剤、ヒーリングサルヴ、手作りパイについてのレシピが書かれている。初心者には調度いいレシピ本だ。

さっそく調合にとりかかるメルルちゃんを横目に、内心でため息をつく。

昔から、私には前世の言葉やことわざを無意識に使ってしまう癖があった。この癖のせいで、周りから変な目で見られたこともしばしば。その都度、適当なことを言って誤魔化してきたわけだ。

まあ、最近いくつかの言葉は浸透させることには成功したけど。

：ああ、だけどアストリッドさんにバレた時は大変だったな。変な実験に巻き込まれるわ、性転換薬を飲まされるわ：、ほんと自由人だよ、あの人。

性転換薬の時なんて、ロナ先生やミミちゃんまで巻き込んだ大騒動になったし。：でも悪いことばかりじゃなかったけどね？この騒動があの子が生まれる要因になったのは事実だし。

後今更だけど、お姉ちゃん？男の娘なんて言葉をどこで知ったの？

うふふ、禁則事項です。

あ、そうですか。

「先生ー、小麦粉ってあるだけ使っちゃってもいいんですかー？」

「うん、大丈夫だよ。そっちのコンテナはメルちゃん用だからね」

「はーい！よっと、どぼどぼー」

それにしても、こっちの世界にはお餅ってないのかな？

アーランドにも知ってる人はいなかったし。

前世の自分は好きだったみたいだから、一度は食べてみたいんだけど…

「ぐるぐる。うわ、なんかいい匂いがしてきたよー」

あのお餅特有のもちもち食感のアーランドにはないものだからね。ぜひとも再現したいなー、だとしたら元になる素材はぷに玉かな？でも、ぷに玉って食べれるように加工できたっけ？

うーん、今度イクセルさんに相談してみよう。

「でっきたー！」

お餅再現計画が脳内でまとまった頃にはメルルちゃんの調合も終わっていた。アトリエの中に美味しそうな匂いが漂う。時間的にまづは一つとあったところだろう。

「うわぁいい匂い…、ちょっとだけ味見…、んんー、美味しいっ！」

「もう、メルルちゃんってば食いしん坊なんだから」

「えへへ、先生も味見してみてくださいよ。えいっと、ほら！」

「ちょ、ちよっとメルルちゃ、むぐっ!？」

「どう、どう? トトリ先生！」

「むぐむぐ、んぐ。…うん、美味しい」

「ほんとですか? やったー！」

「ふふ、ごちそうさま。じゃあその調子で、依頼分も作っちゃおうか?」

「はい! よーし、いっぱい作るぞー！」

気合い十分、元気満点。今度は一気に10個ほど作るために、材料を大量に投入。コンテナの中は空っぽに。

ふふ、これからは自分でやりくりしなきゃねメルルちゃん? これも錬金術士のお仕事のひとつだよ。

予想通り、その日は夕暮れまで調合が続くことになった。そして明日は朝からモヨリの森に出発だ。

私はルーフェスさんに呼ばれているので行けないけど、メルルちゃんも遠足前夜の子供みたいにテンションが高くて寝付かせるのが大変だった。

ちなみに、夕食は残りのパイを二人で美味しくいただきました。
たまにはこんな夕食もいいかな…、なんて思ったり。

第5話『錬金術の活用法と初めての依頼』（後書き）

モヨリの森って二日かかるし最寄りじゃないよね？ってツツコミは入れたのは私だけではないはず。この小説では、城の近くに新たに森を作りいろいろと使わせてもらいました。

第6話『モヨリの森と裏方のお仕事』（前書き）

パイルバンカーって実際に使うと、相手がひどい事になりそうですよね。

第6話『モヨリの森と裏方のお仕事』

錬金術士っ！

第6話『メルルの冒険と裏方のお仕事』

――四月三日

朝早くから出発するメルルちゃん達を途中まで見送り、私はルーフェスさんのところへ向かう。

それにしても、護衛として行く男の子がルーフェスさんの弟だとは驚いた。彼とは簡単に挨拶を交わしたくらいだけど、あの溢れ出るブラコンオーラは凄かった。確かに実の兄がそこまで優秀だと自慢に思わないはずがないよね。

私も何でも出来るお姉ちゃんが自慢だったから分かるな、その気持ち：

あ、えっとブラコン話は本題じゃなくて…、そう！彼の武器だよ、武器。

彼の武器はまた独特なもので、その名もパイルバンカー。

そう、前世で言うところの、男のロマン武器だったのだ。しかも、このパイルバンカー、火薬の自動装填に加え、地面に向けて放てば杭を通じて周囲に衝撃波によるダメージを与えることも出来る。本来の一撃必殺を範囲攻撃として転用した武器になっているのだ。

基本的に魔物の群相手には範囲攻撃、強い個体との戦闘では持ち

前のパワーを生かした押し戻しで、相手の隙を無理矢理作る戦術で戦うのがセオリー。

使い方次第では戦術の核にもなりうる素晴らしい武器なのだ。メルちゃんのためにも自身のためにも、是非とも彼にはマスターをしてもらいたいものだ。

予想外のロマン武器との出会いから数時間後、私は街道を歩いていた。

「うーん、いい天気。開拓が進んでないせいか、こっちは空気が美味しいな」

見渡す限り何にもない街道を一人歩き続ける。その速度は常人のそれより早く、歩くと言うよりは軽く走ると言った方がいい速さだ。

実はこれ、私が履いている靴に秘密があった。この靴は“旅人の靴”と言う魔法アイテムで、街道を移動する場合に限り通常の日数より一日早く移動できるのだ。

ちなみに、私の履いているものは素材を厳選した最上級ランクの品物で小回りが利くため、街道以外にも街の中やダンジョン内でも使うことが出来る仕様です。

「それにしても…、久しぶりの外出がこんな形になるなんてなあ」

私がこんな場所にいる理由を簡単に語ると、要はメルちゃん

サポートだ。

今回の食料配達の話だけど、メルルちゃんに伝えられた話より現状は深刻だった。食糧不足の訴えが届いたのは数日前、つまりそれが出されたのはさらに前ということ。

通常の移動速度ではさらに時間がかかり、現地の兵達の不満が貯まることは必至だ。兵の現状も心配だけど、その状態の彼らにメルルちゃんが接触した時に、万が一にでも何かがあってはたまらない。そういった理由から、私が一足先に国が用意した食料を届けることになったのだった。

「メルルちゃん達には見つからないようにしないとね」

せっかく初めての依頼なのに、本当にお使いだったなんてメルルちゃんには知られたくない。今後も同じようなことがないとも限らないし、隠れて移動するのには今回である程度慣れておかないとね？

私は周囲に注意を向けながら、早足気味に街道を進んで行くのだった。



———四月四日

旅人の靴のおかげでメルルちゃん達より一日早く到着した私は、食料を運んできたということで、空腹でまともに動けなかった兵士

達にえらく歓迎された。

なんでも、残りわずかの食料を切り詰めて配給していたため、皆が空腹に苦しんでいたらしい。

後一日かかると思っていた食料が今日届いて本当に助かったと涙目ながら語る兵士達に、私はこれなら予想していた事態にはならなかったんじゃないかなと思った。

暴動などが起きずに協力しあって耐えている辺り、やっぱり彼らもアールズ国民である。

久しぶりに満足のいく配給が終わり、各員が休息をとっている時に彼らに向けてメルルちゃん達のことを話す。

メルルちゃん達とは街道の途中で擦れ違ったし、あの調子なら予定通り明日の昼頃に到着するはずだ。

ちなみに気配を消す方法がある人から教わったことがあったので、メルルちゃん達にはまったく気づかれることはなかった。あの人には今度お礼を言っておこう。

「と言うことで、明日の昼頃にメルルちゃん達が来るはずですよ」

「なんと！姫様自らですか！それは嬉しいことを聞いた！皆ー！姫様がお越しなるそうだとぞー！」

「な、なんだってー！？」

「マジっすか！俺こっち配属になってからもう姿を伺えないと諦めていたのに！」

「ばっかやろーてめえ、姫様の限定ブロマイドもってたじゃねーか！」

「んな、なんだと！？あのメルルちゃん応援クラブ会員NO. 0 番代限定ブロマイドかッ！？」

「まじか！あれ実質三枚しか出回ってないレアもん中のレアもんじゃねーか！羨ましすぎるぞこのヤロー！」

「ぐ、俺だってあの時仕事がなければ…ッ」

「ぐおおお、姫様に会えるのも嬉しいが、やっぱりブロマイドも見たい！後で見せてくれ！」

「うおおお！久しぶりに生で姫様が見れるなら問題ねえぜ！あ、でも俺にも後で見せろよ？」

「姫様の生足…はあはあ」

「カボチャパンツ最高ー！」

「ダメだコイツ等…、早く何とかしないと…」

メルルちゃんが来ると話した瞬間異常な盛り上がりを見せる兵士達に私は哑然とした。あ、頭が痛い。なんなのコイツ等…

だいたい、何？メルルちゃん応援クラブって…？

そんなのあったの？驚きの事実だよ。

改めてメルルちゃんの人気っぷりを確認した私だった。



――四月五日

昼の配給が行われる前にメルルちゃん達がやってきた。私は心配だったのでそのままモヨリの森に残り、隠れながらその様子を眺めていた。

事前に打ち合わせていた通り、兵士達にはメルルちゃんが来るとは思っていなかったといった反応をしてもらった。

ちなみに、ノリがいい彼らは満場一致でこの話に協力してくれた。

「姫様のためならドラゴンとだって戦ってやるぜ！」

素晴らしい忠誠心である。ちなみにメルルちゃん達が帰った後は手作りパイ争奪戦が勃発、お代わりを賭けたデスマッチが繰り広げられ、落ち着いて味を楽しむ暇すらなかった。

結局、落ち着いて食べれたのは早々に避難していた例のブロマイドの兵士だけだったとか。なんて運のいいやつだ。

これからはブロマイド兵士と呼んであげよう。

せっかくモヨリの森まで来たのだから採取をやっていないかねとね。

そんな感じで辺りを探索することに。

奥に行くと言った瞬間、兵士達は心配そうな顔で奥は危険だと言って同行を申し出てきたけど、試しに近くにいたカロツテうさぎとウォルフをフルボッコにして見せたら、顔を真っ青にして口々に鬼か…、いや悪魔だ…とか呟いていた。

まったく失礼な奴らだ。単に全属性ダメージ附加の杖で飛びかかってきた相手に対しカウンターからの空中コンボを決めて、トドメにと以前試作したN/Aを投げつけてやったただけなのに…

こういった場面でのオーバーキルは常識だよね。実際、兵士の皆は私の実力を知って誰一人文句を言わなくなったし、お願い事に対する対応も早くなった。

うんうん、さっきは失礼な奴らだとか思ってたごめんね？お土産まで用意してくれるなんて本当にいい人達だよ。

結局、その日は森の奥で採取とノーコン狩りに精を出し、日が暮れる前にはそこその量の素材を手に入れて在住用のキャンプに戻ってきた。

採取の結果としては、あまり品質のよい物は採れなかった。

ブレイン草——つまり雑草ばかりで、まずはこれをどうにかしないとまともな素材は採れないだろう。

この件に関しては兵士達も問題にしており、メルルちゃんにその対策を依頼していた。正式な依頼書は既にアトリエ宛で送られており、詳しい話はそこに書いてあるらしい。

これなら、近い内にモヨリの森で大規模な雑草狩りが行われるだろうから、本格的な採取はその後でってことになるかな。

私も参加できればいいんだけど、こればかりはその時になってみないと分からない。

メルルちゃんが関与し始めたことで本格的に動き出したアールズの開拓事業。

これから私に対する仕事の依頼も増えるだろうから、それに対応して自由な時間も減るだろう。

だから、メルルちゃんが自分の実力で対処出来る範囲の依頼には自分の力で対応できるようにしてくれるまで、私は動きが制限されることになる。

メルルちゃんの錬金術士としての腕が上がり、その面でのサポートがいなくなれば、私も採取や新天地開拓への参加が出来るようになるのだ。

そういった理由からも、メルルちゃんには錬金術の勉強を是非にも頑張ってもらいたい。



———四月六日

昨日の夜中にトラベルゲートでアトリエまで戻ってきた私は簡単

な朝食を済ませて、旅の間に付いた汚れを落とすためにシャワーを浴びていた。

「ふうシャワーもいいけど、やっぱりお風呂に入りたいな…」

やはりお風呂が恋しい。このアトリエに取り付けられていたのはお風呂ではなくシャワーだった。

アールズではシャワーが一般的なのか、お風呂というものはあまり知られていないらしい。

これは…、自分で作るしかないようだ。一日の疲れを癒すには湯船に浸かるのが一番効果的だからね。

アトリエのちょっとした改築計画を頭に浮かべながら、水を止めてタオルで体を拭き普段の錬金術士の服に着替える。

「あ、トラベルゲートの点検をしておかないと…」

忘れかけていたことを思い出す。トラベルゲートは久しぶりに使ったので、異常が出てないかの確認はしっかりとしておかないといけない。

ここで件のトラベルゲートについて簡単に説明しておこう。

トラベルゲートはあらかじめ設定しておいたアトリエに一瞬で帰還することの出来る魔法アイテムだ。採取に行った帰りや新しい土地に出かけた際に使えば、時間のロスなしに一瞬でアトリエに戻る事が出来るため、採取した素材の劣化をある程度気にせずに活動できる錬金術士の基本装備と言ってもいいくらいの便利アイテムなのである。

私が昨日の今日でアトリエにいる理由はこのアイテムの存在があったからだった。

トラベルゲートの点検を終えて、後はメルルちゃん達が帰ってくるのを待つだけである。

少し気になっていたモヨリの森からの依頼書がポストに入れられているのを確認し、ついでに自分宛のものがなくも確認しておく。うん、まだないみたいだ。ポストだけど、これからは頻繁に確認しなくてならないだろう。

これからは何時依頼が来るとも限らないからね。

あ、そろそろメルルちゃん達が戻ってくる時間だ。

ふふ、昼時でお腹空かして帰ってくるだろうから、昼食の用意をしといてあげなきゃね？

せっかくだし、久しぶりに料理でもしてみようかと思って、私はコンテナから一般的な材料を取り出し台所に向かう。

「ふっふっふ、イクセルさんをも唸らせた私の实力を見せてあげるよメルルちゃん！」

何故か料理人っぽく言ってみる私だった。

第6話『モヨリの森と裏方のお仕事』（後書き）

モヨリの森の兵士達はこんなやつらで行きます。食糧難はゲームよりひどい状態だったかもしれませんが、アールズ独特の人の良さで耐えていました。

それと今回の兵士達が入会していたメルルちゃん応援クラブですが、この小説ではメルルちゃんには兵士達のアイドルになってもらいました。可愛くて友好的な性格のお姫様とか人気がでなきゃおかしいだろという私の勝手な言い分です。

これで開拓先の依頼を少し待たせる事になっても、逆に楽しみにしていました！と言った空気になってくれるはず。ちなみにファンクラブは今後も増加する予定。

第7話『新しい生活ときのご姫』（前書き）

この作品は作者の2週目プレイが元になっています。作中の調査にかかる日数や依頼の消費時間、参考書やレシピの獲得時期など都合のよい改変を行っている場合がありますので注意してください。

第7話『新しい生活ときのこ姫』

錬金術士っ！

第7話『新しい生活ときのこ姫』

———四月七日

モヨリの森の雑草狩りについては大規模なものになると予想されたので、モヨリの森側と予定を調節した結果、五日後に行われることに。

メルルちゃんだとモヨリの森までは移動に二日かかるので、つまり間の三日間は自由に使える時間が出来たわけだ。

これを利用して、はじめての参考書の残り二つのレシピ、ヒーリングサルヴと中和剤の調合に取りかかるようだ。

調合に関しては経験したことしか力にならないからね。どんどん作っていかないと。あの、でもねメルルちゃん…？

「トトリ先生、とりあえず夕食は手作りパイでいいですか？」

食べ物を量産するのは止めて…、食べるのけっこう大変なんだからね？

「大丈夫です！余った分は城の皆に差し入れますから！」

いやいや、メルルちゃん貴方、余るほど作るつもりなの？

え？レシピを三日で完璧にマスターしたい？
だから、たくさん作る？

あはは…、マジですか…

こ、このままだと、三日間手作りパイ尽くしになってしまう…ッ！
それは真面目に勘弁して欲しい。

たしかに手作りパイは美味しい。だけど、元が小麦粉と塩と水だけあって手作りパイには後を引くものがないのだ。

つまり、なにが言いたいかと言えば、…飽きやすいのである。たとえ三日間だけだとしても、本当に辛い。

分かったことを言っているように聞こえるかもしれないけど、これは私の経験談から来ている真実。

私も錬金術士になりたての頃はメルちゃんと同じように大量に作ったことがあるけど、その後処理のためにその日から毎日食卓に手作りパイが並ぶようになって、しばらくはパイの類を見ただけで拒否反応を示すようになったことがある。ちなみにその時は村の皆に配って回っても、十日ほど食卓に並ぶ量を作っていた。

計画性がなにより大切だと感じた瞬間である。

あ、ちなみにメルちゃんだけど、デジエ王から錬金術を続ける条件として、三年以内に国の人口を三万人にするといった内容を出されたらしく、目標を達成するためにこの三年間はアトリエで一緒に暮らすことになった。

やたらパイの調合に気合いが入っているメルちゃんを見ていると、これからの三年間の食に今から不安を隠せない。

ああ、大丈夫かな…



———四月十日

ケイナちゃんまじメイド。

あ、突然何を言い出すんだコイツとか思わないで欲しいな。

こんなこと言い出した理由がきちんとあるんだから。そう、あれは二日目の昼時、メルルちゃんが当たり前のようにパイを取り出した時のことだ。

「失礼します。あ、やっぱり今日もパイでしたか。メルル、そればかりでは体に悪いですよ？城の厨房をお借りしてシチューを作ってきたので、トトリ様も一緒に召し上がってください。たくさん作ってきたので、二日は持つと思いますから」

「あなたが神か…ッ」

「ふふ、大げさですよトトリ様。私はただのメイドです」

こうして、地獄の再来になると思われた三日間はメイド少女ケイナの手によって救われたのだった。

どうか、これからの三年間もケイナちゃんの差し入れがあります

ように！

「じゃあ行ってきます先生！」

「うん、いってらっしゃい」

予定通りメルルちゃん達はモヨリの森の雑草狩りに参加するために出発。私は開拓事業で不足している物資の調合といったお仕事が出来たので今回は不参加だ。

メルルちゃんが作った大量の中和剤とヒーリングサルヴを片づけ、依頼の品を作るために足りない素材の採取に出掛ける。

それにしても…、よくこれだけの量を作ったものだ。

たぶん、錬金術を使えるようになって、楽しくてしょうがなかったんだろうな。私もそれには覚えあるし。

メルルちゃんはこの三日間で、はじめての参考書に載っているレシピは全て完璧にマスターした。

そろそろ次のレシピを渡してもいいかな？ 頑張ってるみたいだし、次のステップに進むのも問題ない。

うん、メルルちゃんが帰ってきたら新しいレシピを渡そう。

素材を採取しながらメルルちゃんに渡す次のレシピを頭に思い浮かべる私だった。

ちなみに襲ってきたウォルフや青ぷには運動の相手になってもらいました。ケイナちゃんのシチューが美味しくて、ちよっと食べ過ぎ

ぎちゃったんだよねー



――四月十六日

帰ってきたメルちゃんに新しいレシピを渡す。今回渡すのはインゴット、クロース、ハチミツのレシピだ。

インゴット系列は主に金属性の魔法アイテムや資材を調合する場合や、武器の材料として使用する。

特に、武器に関してはこの段階で全てが決まると言っても間違いではなく、強い特性を持った武器を作り出したければインゴットに時間を費やさなければならぬのは必然である。

クロース系列は主に布を使う資材の調合と魔法アイテムの外面に使う場合や、衣服――この場合は鎧の類の材料として使用する。

武器と同じく、開拓や戦闘で身を守る鎧となる衣服も当然その材料となるクロースの段階で全てが決まるので、その材料にする場合はじっくりと特性を吟味してその時点での最高レベルにしていきたい。

最後にハチミツだが、これは主に料理の材料に使用する。一応、いくつか調合用アイテムも作れるけど、使用頻度で言えば料理系統の調合によく使うイメージを持っていれば問題ない。

私が各種アイテムの簡単な説明を終えると、話を聞いたメルルちゃんはやさしく調合に取りかかるようだ。

「ひとまず、コンテナに材料の鉱石が入っているインゴットから挑戦してみるといいよ」

「はい、分かりました。あ、でも足りない材料はどこで手に入れればいいんだろう？」

「ハチミツの材料になるハチの巣なら今のモヨリの森でなら採れると思うよ？ クロースに関しては今はちょっと手詰まりかな？ こっちは開拓を進めていけば、自然と素材が集まってくるはずだよ」

今までのレシピは材料が比較的に身近で手に入っていたため、あまり苦労はしなかったが、今後は採取地に赴いて探してくるということが多くなるだろう。

中和剤のように井戸で汲んできた水や庭先で拾ってきたういで調合出来ますってわけにはいかないからね。

まあ中和剤は何でも材料に出来るという特徴から他の物を調合する際にいろいろと便利だから、ある意味錬金術の基礎で極意なんだけど。

事実、私も武器や衣服で大変よくお世話になりました。

本日のメルルちゃんの成果は、何度か失敗はしたけど無事インゴットの調合に成功。旅の疲れも残っているため、本日の調合はそれだけで終了。

今回のインゴットのように、この先は調合に時間がかかる物が増えていくので、メルルちゃんには無茶をせずに頑張ってもらいたい。



———四月十八日

今日も朝からメルルちゃんは調合調合。そろそろインゴット用の鉱石も尽きる頃だろう。繋ぎの中和剤量産が始まるのも遠くない。

私は相も変わらず不足している開拓物資の調合に取りかかっている。

内容としては各種薬や魔法アイテムの類だったけど、最近新たにそこへ建築資材の類が加わった。

なんでも、メルルちゃんの活躍が国民にも知られていたのか、今回のことで新たにアカデミーが作られることになったそうだ。

私もその材料作りに手を貸しているため、数日で完成する予定で事業は進んでいる。

ちなみになぜアカデミーかと言えば、メルルちゃんの希望らしい。今回のメルルちゃんの活躍が国民の意欲に火をつけたのか、今まで滞っていた建築事業も活性化した。そして、今後の彼女の活躍によってさらに活性化するだろうとのことだ。

そう言った理由があつてか、事業側としては建築予定の施設の優先度をメルルちゃんに決めて欲しいのだと言う。もちろん、この国にそれに反対する人間などいないので、これに関しては何も問題なかったらしい。

と、そんな裏があつて今回はアカデミーが作られるようになったわけだね。

メルルちゃんも建築事業の件で、これからは自分が国を引っ張っていくという自覚が生まれるのかな……
その成長が少し楽しみな私だった。

その日の夕方、アトリエに突然の来客があつた。ちょうど、夕食の食材がないことが発覚して、どうしようか悩んでいた時だ。
初めてアトリエに来た時のメルルちゃんを彷彿させるような登場の仕方をして見せてくれたのはファナ・オルシズさんという名前の女性。

薄着の服に大きな胸と短パンから伸びる生足、背中に羽織る旅用のマントが特徴的な女性だ。まあ見た目は冒険者風だと言えば分かってもらえると思う。

彼女はメルルちゃんの昔からの知り合いで商売業を営んでいるら

しく、私がアールズに来る少し前から商品の補充と新たな目玉商品獲得のために街を離れていたらしい。

とにかくアグレッシブな印象を受ける彼女だが、今回は街に戻ってきた報告と商売の宣伝を兼ねた挨拶周りだそう。

それで件のお店だけど、並木通りに露店の形で商売することのこと。

「街のお店ではあまり手に入らない類の商品を扱っているから、フアナ雑貨店、どうぞ覗いて行ってちょうだい！」

彼女はお土産として持参した自家製きのこシチューを鍋ごとメルちゃんに手渡すと、それだけ言って早々に立ち去っていった。

どうやら、挨拶周りはまだ終わっていないらしい。商売人は大変である。

その日の夕食の場では、メルちゃんがきのこについて熱く語ってくれました。なんでもアールズの数少ない特産品だそうで、メルちゃんも大好物なんだと。

きのこ姫…、まるでピー…いや、止めておこう。

脳裏に浮かんだ配管工物語のヒロインを打ち消して、メルちゃんきのこの談義を耳にしながらシチューを一口。

きのこシチュー美味しいです。

第7話『新しい生活ときのご姫』（後書き）

錬金術で料理が作れたら、私だったらそれで済みます生活になりそうです。

この作品のトトリは基本自炊で暮らしています。一応前世の知識から、毎日錬金術で作った料理なんて感覚的にはファーストフードで暮らすようなものだと考えていたりします。あと、この作品のパイ系列はホール丸々1個で出て来ますので、普通に2〜3人分あったりします。これをバンバン量産された日には…

第8話『王国の発展と新メニュー』（前書き）

今回はちょっとしたおまけがあります。

第8話『王国の発展と新メニュー』

錬金術士っ！

第8話『王国の発展と新メニュー』

――四月二十四日

待望のアカデミーが完成した。街の人々にも教養が学べる施設と
いったことで大盛況らしい。現在は第一期生の入学に向けて、周囲
の村などにも呼びかけを行い、生徒や教職員などと言った人員を確
保している最中らしい。

どうやら、本格的に業務が始まるのはもう少しかかりそうだ。

これに加えて一つ嬉しいことがあった。

アカデミーの建設が興味を持たれたようで、アールズ周辺の村か
らアールズ王国に移住する人が増えたのだ。

元々アールズ王国については昔から存在していたこともあってか、
周辺の村や小さな街に多く知られていた。もちろん今回のアールラン
ド併合に向けた国を上げての開拓事業についても広く知れ渡ってお
り、王国への移住や街の吸収などといった考えは多くの人が持って
いた。

今回、目に見える形で発展が見えてきた王国へ、期待を込めて移
住する人達がいてもおかしくないわけだね。

もっとも今回の移住はアールズ地方で予想される総人口から見ると

と、本当に微少でしかない。

未だ多くが様子見といった姿勢であるのが現状。

だけど、今回から分かるようにアールズ王国の発展は注目されているのだから、これから設備を充実させていけばどんどん移住する人が増えるはずだ。

つまり、メルルちゃんはアールズ周辺の開拓を続けて、どんどん新しい設備を増やしていけばいいってことだね。

現在のアールズ王国の総人口は移住予定の人達を含めて約六百人。王国ランクも1ランクアップで、例えるなら…、そうだなあ【田舎男爵の村】ってところかな？

今回の人口増加や王国ランクアップの話を聞いたメルルちゃんは意気込みを新たに、王国開拓局の依頼を受けて王国の北側にあるハNDERLの森へと向けて出発していった。

一応、王国ランクアップの報告の時に新しい参考書を渡されていたはずだけど…、メルルちゃんったらあまり中身を見ないうちに飛び出して行っちゃったんだよね。

えっと、街の人に感謝されて嬉しかったのは分かるけど、しっかり装備は調えないと大変だと思っただけだなあ…

特に今回渡された参考書——アールズ開拓旧史には、戦闘の主力になるフラムのレシピがあったのだ。これを作るだけで戦闘がかなり楽になったはず。

メルルちゃん、うにを投げるだけじゃこの先辛いよ？

私は今頃苦勞しているだろうメルルちゃん達のことを思い浮かべてため息をつくのだった。

―――五月四日

昼過ぎにハンデルの森までの開拓へ出ていたメルルちゃんが帰ってきた。

今回はハンデルの森までの道程に出現する魔物の討伐が主な内容だったらしく、ハンデルの森をゆっくりと探索する時間はなかったそう。

理由としては、内容が魔物との戦闘が中心だったため、パーティーの消耗が激しかったからみたい。

今回がメルルちゃんにとっては初めての本格的な戦闘だったから、初めて見る魔物などを相手に作戦の組立からパーティー内の呼吸合わせに大変だったそう。

「うう…、やっぱり今まで通りとはいかないなあ。うにだけじゃ限界があるよー」

「えっとね、メルルちゃん、錬金術士は様々なアイテムによる多様な攻撃と見方へのサポートが売りなんだよ。今回のことで分かったと思うけど、錬金術で作ったアイテムの有無次第で攻撃の幅が大きく異なるの。だから、調合による各種アイテムの開発はある意味で

死活問題。私達が直接戦うには装備品を一級品にしくちゃダメなんだよ」

「う、そうですね…、私は錬金術士なんだからアイテムを使わなきゃダメですよ。これからは参考書にはきちんと目を通すようにしましょう」

「そうだね。その方がいいよ」

「うーん、だけど装備品次第で私でも直接戦えるって本当なのかなあ？」

「本当だよ。戦闘技術はこれから嫌でも付いていくだろうし、見たところメルルちゃんは戦闘センスが悪くはないからね。あとは、錬金術士としての腕前を遺憾なく発揮して武器や衣服を作ってあげればいいだけだから」

「ふへー、って結局錬金術の腕が上達しなきゃダメじゃないですかー！」

「あはは、まあ何処まで行っても私達は錬金術士だからね？」

結局、錬金術の腕を磨くために日々努力。これは欠かせないってわけだね。

その後、早速新しい参考書を読み始めるメルルちゃん。私はといえば彼女がお土産にと採取してきてくれた素材を確認中。

今回メルルちゃんが採ってきてくれたのは、こやし、何かのタマ

ゴ、マジックグラス、あとはマンドラゴラの根だ。

こやしは主に燃料。何かのタマゴは燃料としても使えるけど主な用途はやっぱり料理かな。マジックグラスは薬品の材料として重宝する植物で、ヒーリングサルヴなんかはこれを原材料にしている。マンドラゴラの根はマンドラゴラと言う魔物から採れる素材で、主に薬の材料や毒の材料なんかに使われる。

なるほど、この辺りだとまだこのレベルの物しか採れないのか。やはり、本格的な採取はもう少し活動範囲を広げないとダメなようだね。

メルルちゃん、次回もお土産楽しみにしてるからよろしくね？

「えへへ、まかせてください！」

———五月五日

ハンデルの森の管理人から依頼書が届いた。

内容は作物を荒らすカタクサうさぎの退治と開拓の際に邪魔になるアイヒエの木の伐採、そして開拓拠点を作るための圧縮木材を届けるといったものだ。

カタクサうさぎは、モヨリの森に生息しているカロツテうさぎの亜種で、手にはにんじんの変わりにカタクサという植物を持っている。そしてなにより、カタクサうさぎは縄張り意識が強く交戦的な性格だ。

きちんと装備を整えていかないと予想外に手こずるかもしれないね。

アイヒエの伐採については、素材を大量に手に入れるチャンスとも考えられる。

今回は圧縮木材の提供も依頼に入っているけど、その材料、言わずながらアイヒエを代表する木材だ。

今回使用する材料はモヨリの森で採取してきたアイヒエ。なるべく品質が高いものを選んで高品質な物を調査すれば、森側で使用する数を減らせて必要な数を少なくできるだろう。

「はい、ルーフェスさんから預かってきた参考書。今回の依頼で必要になる圧縮木材について書かれているからよく読んでね？」

「新しい参考書！ トトリ先生、ありがとうございます！ もールーフェスってば、渡すならこの前城に行った時に渡してくれればよかったのにー」

「メルルちゃん、ルーフェスさんも忙しいんだからあんまり文句言っちゃダメだよ？」

「わ、分かってますよ！ ただ、もうちょっと早くてもよかったんじゃないかなーって思っただけで…」

「もう、…ふふ、でも錬金術の腕を上げる期間があってよかったでしょ？」

「う、確かに…。うう…、でもその言い方だとなんか意地悪ですよー」

「あはは、ごめんね？でも錬金術の腕は確実に上がってるから心配しないでね？」

「本当ですか！？なら今度また新しいレシピ教えてくれますか？」

「うーん、そうだね…。それはもう少ししたらかな？でも今はその参考書をマスターしないとね？」

「はい！約束ですよ！」

今回ルーフエスさんから預かっていた参考書——錬金建設工学教本には、クラフト、研磨剤、圧縮木材、小麦粉、ゼツテルのレシピが記載されている。い

どれもこの先お世話になる物ばかりだが、ここでは主にクラフトを紹介しようと思う。

クラフトは爆弾系の攻撃アイテムに分類されており、その効果は表面に付いた棘や本体の衝突による中範囲に対する物理的なダメージだ。

上位にダイオクラフト、メガクラフトなどがあるが、クラフト系統は物理ダメージを主としているため、ある程度強い魔物相手になつてくると属性ダメージの方が効率がよく、好んで使う人は少ない。

しかし、その生産性の良さと比較的扱いやすい性質から錬金術士になりたての者からは人気の高いアイテムでもある。

実際ロロナ先生は昔から愛用していて、今では自分なりに改良した誘導式クラフトを開発して魔物相手に猛威を振るっている。

私がフラムを使いやすく改良して通常の攻撃手段として常備しているのと同じだね。

錬金術士は実力を付けると、自分にあった攻撃アイテムを常備するようになり、やがてそれが通常の攻撃手段になっていくのだ。

と解説をしているうちに一通り参考書を読み終えたメルルちゃんが調合を開始した。ひとまず依頼内容の圧縮木材は後回しに、まずは素材が手に入って調合出来るようになったクロークを作るようだ。それからフラムとクラフトを作り、最後にそれらの経験を活かして圧縮木材を作る予定らしい。

日数的にはそれなりにかかるけど、ハンデルの森側もその辺りの事情は理解しているので自分達の力で出来る限りはすることだ。

やはりアールズ国民は良い人ばかりで助かる。

———五月十五日

早朝、無事に目的の調合を終えたメルルちゃんがアトリエを出発しようとしていた。

「メルルちゃん、依頼の品はちゃんと持った？攻撃アイテムはなるべく多めに持って行く方が安心だよ。回復アイテムはヒーリングサルヴがあったはずだからそれを持って行ってね」

「どれもぼっちりです！今回はきちんと準備したから心配しなくても大丈夫ですよ！」

「そう？うん、ならこれ、この前メルルちゃんが採ってきてくれた素材で作ってみたんだ。よかったら、道中で食べてね？」

「うわー、きのこパイだ！いいんですか！？ありがとうございますっ！」

メルルちゃんに手渡したのはこの間の開拓依頼でお土産に貰った土かぶりー普通のきのこを使ったパイ。

手作りパイのレシピに少し手を加えて作った。もちろん調合品になります。

数も揃えたし日持ちもするだろうから、旅のお供にも活躍してくれるだろう。最も、旅の間の食事関係は同伴するケイナちゃんに任せておけば心配ないだろうけどね。

今回が初めての錬金術を使った本格的な依頼だから、メルルちゃんには頑張ってもらいたい。今回のきのこパイはその応援の気持ちみたいなものだ。

実際、メルルちゃんは大好物のきのこ料理を前に食欲を押さえきれないのか可愛いお腹の虫を鳴かせていた。

「えへへ、なんだかお腹空いちゃった」

「もうメルルちゃんったら、…ちよつとだけだよ？」

照れながらも物欲しげに手元のパイを見ているメルルちゃんに少し呆れながら、昼用にと多めに作っておいたきのこパイをコンテナから取り出してくる。

目を輝かせてそれを眺めるメルルちゃんがなんだか家に預けてきたあの子に似ていて少しおかしかった。



———五月二十七日

メルルちゃんが未だアトリエに戻らず、少し心配していたところにハンデルの森から手紙が届いた。それによると依頼内容を無事終えたメルルちゃん達だったが、そのまま西側のきのこの森方面へと足を進めることにしたらしい。

なんでも今回はアイテムを大量に持って行ったので、まだまだ余裕があるからだそうだ。いや、それにしても——

「きのこの森か…、絶対にお土産の八割はきのこ類だろうな」

今回のお土産が半ば確定した瞬間だった。

メルルちゃんのこととは心配いらないと安心できたので、私は自分の仕事に集中することにする。

今回の仕事も不足している開拓物資の調合だ。メルルちゃんが依頼に出かける前に何かを建設すると決めたのか、数日前までは再び建築資材の調合依頼が多かったけど今は落ち着いている。

ちなみに今回は何を作るのかと聞いてみると、アカデミーの件で移住した人達の住居スペースが足りなくなってきたので住宅街を建設中とのこと。

確かに、今の即興の仮設住宅ではこれからの人口増加に耐えられないだろうからね。王国側としてはここで新たに大規模な住宅街を計画してるわけだ。

今回はその計画の一部分と言った感じで、先を見越して今後も住宅スペースの拡張は行っていくようだから、定期的に同じような資材の依頼が入ってくるだろう。

…暇を見て資材を量産しておいた方が良さそうだ。

私は今後のことを考えて少し多めに調合しておくことにした。

昼は久しぶりに酒場へ顔を出した。私の姿を見つけたフィリーさんが少し文句を言いながらも嬉しそうに歓迎してくれた。

「ちよくちよく顔を出してくれるって言ったに…、トトリちゃんの嘘つき」

「う、だからごめんってば。えっとフィリーさんはお昼まだでしょ？お詫びにお昼おごるから許して？」

「え、本当？ うん、なら許してあげる。実は最近新メニューが追加されて、それが美味しいって評判だったから気になってたんだ。少し値が張って給料日前で手が出せなかったから、諦めてただけど・・・、やった！ トトリちゃんありがとう！」

「ええー！？ ま、まあ私も新メニューはちょっと気になるけど・・・、うう、あんまり高くないといいなあ・・・」

「えへへ、楽しみだなー。っとそれは置いて。本日はどのようなご用件ですか？」

「うう・・・、昔は弱腰だったのに・・・。あ、ああ！ えっと以前依頼を受けた品を収納しに来ました」

「はい、では確認しますね。・・・はい、依頼内容通りですね。お疲れさまでした、こちらが報酬になりますね」

「ありがとうございます。・・・で、フィリーさんお昼休みは何時頃になるの？」

「ちょっと待ってね。・・・もう休憩入っていいって。準備するから先に席に着いておいて」

その後、フィリーさんと一緒に酒場で話題の新メニューを食べた。なるほど、話題になるわけだ。出てきた料理は実に美味しかった。ただ冒険者をメインの客層にしているのか、値段が少し高めで一般受けはしにくいだろうなあ。

最近稼いでいたというのに、自分で使う前から既に少し軽くなつたお財布を眺めてそう思った私だった。

※本編はこれにて終了、以下はおまけです。なお、注意事項としては今後の展開のネタバレが少し含まれているので、嫌だと言う人は回れ右してください。もっともアトリエでネタバレはあんまり意味ないと思いますが…、それでもいい方は先をどうぞ！

◇リリアのアトリエ／アレグレッタの錬金術士／

錬金術士っ！の続編ポジション。

◇彼女の物語のはじまり

主人公はリリアーデベルン・レーデルベルトと言う名の少女。幼

い頃に錬金術士エンドを迎えたメルルに拾われロロナとトリを交えた三人で人里離れた錬金術士の庭園で育てられる。小さい頃から母達の使う錬金術に強い憧れを抱いており、物語は彼女が十才を迎えて錬金術を学ぶことを許可されたところから始まる。

◇世界観とプロローグ

アールズ併合に向けて奮闘したメルルの物語から約百年後、アールズ共和国は大陸一の大国となっていた。錬金術の大幅な発展によってこの数十年で人々の間にも錬金術は広く知れ渡り、それを操る錬金術士は人々の憧れとなった。さらなる発展のため、共和国は錬金術士を育て、お互いを競い合わせることで技術の向上を謀ることを目的とした錬金術士の街アレグレッタを建造する。アレグレッタの誕生から数十年、今、錬金術士の街に次世代の風が吹き込もうとしていた。

◇人物設定

・リリアーデベルン・レーデルベルト

愛称はリリア。本作品の主人公で花丸笑顔の似合う十才の少女。身長は百二十センチ前半と若干小柄で、顔付きはどことなく幼い頃のメルルに似ている。綺麗な翡翠色の瞳をしており、何処か人を引きつけて離さない独特の雰囲気を持っている。手入れの行き届いた自慢の金色の髪をメルルから貰った髪留めでツインテールにしており、服装はミニのワンピースに装飾を取り付けたような錬金術士の服を着ている。性格は天真爛漫で、何にでも興味を持ちすぐに手を出してしまう興味の塊のような少女。好きな物はリングパイとお

母さん、嫌いな物は虫ときのコパイ。

赤ん坊の時に歴代最高峰の錬金術士として大成したメルルに拾われ、トトリとロロナを交えた三人を母親として人里離れた錬金術士の庭園と呼ばれる場所で育てられた。幼い頃から母親達が使う錬金術を間近に見て触れてきたせいも、錬金術に対し強い憧れの感情を持つ。庭園には彼女と母親達に加えてホムンクルスが一人しか存在せず、彼女は箱入り娘の如く大切に育てられたためか、かなり世間知らずな娘に育ってしまった。母親達に一人前の錬金術士として認められ外の世界へと足を踏み出した際には、それが原因でいつも周りを巻き込んだ事件を引き起こすことになる。

錬金術士としての腕前はメルル達が絶賛するほどのもので、将来は歴史に名を残すほど偉大な錬金術士になることを期待されている。

・トトリ

庭園に住むホムンクルスの少女。見た目はトトリを小さくしたような姿をしており、その姿とは裏腹に彼女達と共に永い時を生きってきたためか錬金術の知識は一流と呼ばれる錬金術士のそれを上回る。彼女はメルルの錬金術の先生であるトトリが生み出したホムンクルスであり、その材料にはとある事件で偶然手に入れる機会があった彼女の精液を使用したため、本人の幼少期にうり二つな容姿をしている。生まれた当初はちむと呼ばれた他のホムンクルス達と同じように小さい姿をしていたが、その後永い時をかけて今の十才ほどの姿まで成長した。

リリアの幼い頃からの遊び相手であり、彼女が成長した現在も親友としてその側に寄り添っている。性格はマイペースで口数が少な

い。友好的な相手には優しいが、敵対する相手に対しては容赦はしない。好きな物はマスターとマスターの手料理、嫌いな物はタコ。

・アリーシャ・トレバート

錬金術士の街アレグレッタで母親から引き継いだ小さい工房を構える十三才の少女。外見は肌にぴったりと張り付く吸水性の高い上着にホットパンツで、癖のある赤毛の髪をポニーテールにしている。性格は困っている人を放っておけないお人好しで、その性格のせいで貧乏くじを引くことも多い。好きな物はマグロ、嫌いな物は暗くて狭い場所。

流行病で倒れた錬金術士の母の代わりに工房を任されることになった彼女だったが、肝心の錬金術の腕はお世辞にも良いとは言えず、すぐに工房は経営の危機に瀕してしまう。そんな中、街で問題を起こしていたリリア達を持ち前のお人好しな性格から助けることになる。その後、リリアが優秀な錬金術士だと知った彼女は、数日後に迫った工房の存続を賭けた国の査定に力を貸して欲しいとリリアに申し出たのだった。

・ノワール・ブランテューヌ

アレグレッタで一、二を競うほどの実力を持った工房の一人娘。年は十三で外見は装飾の施された長袖のドレスにミニスカート、腰の辺りまである自慢の紫色の髪を一部ツインテールにしている。性格はプライドが高く意地っ張り、そのせいでよく人に誤解されるが、本当の彼女は根が優しく寂しがり屋の少女。好きな物はアイスクヤンディと甘いもの、嫌いな物はクモと辛い食べもの。

一流の錬金術士である母親を見て育ち、幼い頃から立派な錬金術士となるために努力してきた。十三才になり自分の工房を持つことを許されてからは期待の新人として街の人から一目置かれている。夢は母親のような一流の錬金術士になって自分の工房を街一番の工房にすること。その夢に向けて日々修行中の彼女の前に突然現れた自分以上の錬金術の腕前を持つリリアの存命が、彼女の運命を大きく変えることになる。

◇その他の人物設定

・メルルリンス・レーデ・アールズ

元アールズ王国の姫君。年齢不詳。外見は十四才の頃の姿で、当時の錬金術士の服を濃いオレンジ色に染めて、その下にはレオタードのような特殊な下着を着ている。なお、王族を象徴していた頭王冠とマントは付けていない。性格はお転婆な部分が身を潜め、冷静な判断が下せるようになった。好きな物はきのこ全般、嫌いな物はリザードマン。

アールズ併合から十数年に渡り王族としてアールズの安定を見守ってきた彼女は外敵の驚異からアールズを守り抜いた後その立場から身を引き、再び錬金術士としての道に本格的に力を注ぎ、歴代最高峰と言われるまでに成長する。その後、トトリとロロナに誘われ錬金術士の庭園と呼ばれる場所で暮らすことに。その際、アストリッドによって他の二人共々若返りの薬を飲まされ十四才の姿に固定され、そのまま共に永い時を過ごすことになった。

赤ん坊だったリリアを拾ってきたのは彼女。庭園にいた彼女達は

揃って結婚していなかったもので、初めての子育てに悪戦苦闘しながらもこの年までリリアを育て上げた。そのため彼女達はリリアを本当の娘のように可愛がっており、特にメルルは目に入れても痛くないほどの愛情を抱いている。

・トトウーリア・ヘルモルト

錬金術士っ！の主人公。年齢不詳。外見は十四才の頃の姿で、装飾の施された蒼いドレスに後付けの長袖、半透明のフレアスカートで下には特殊なレオタードのような下着を着ている。頭のアクセサリーはティアラ状のものに変わった。性格は誰にでも優しく知性的、常に穏やかな雰囲気纏っているが戦闘時には凜とした雰囲気纏い冷静に戦況を見渡す。好きな物はさかな料理、嫌いな物は豊かな胸。

アールズ併合のための人材派遣でアーランドに出向いていたが、併合後はその責務も終わりロロナと共にアーランドに帰還し、長く空けていた工房の営業を再開した。その後のアーランド共和国のさらなる発展に貢献する中で錬金術士としての腕前は歴代最高峰レベルまでに上がり、ロロナと合わせてアーランド共和国発展の要となった歴代最高峰の錬金術士として後世に伝えられる。

自らが造ったホムンクルスのトトを妹や娘のように可愛がっており、永い時を生きる中でホムンクルスの寿命に関しての問題を解決し、現在は成長した彼女と錬金術士の庭園で一緒に暮らしている。趣味は料理で、庭園の食糧事情は全て彼女が担当している。

・ロロライナ・フリクセル

トトリの錬金術の先生。年齢不詳。外見は十四才の頃の姿で、二十歳頃に着ていた錬金術士の服に所々手を加えたものを着ている。頭の帽子はなくなり、特製のローブを身に付けている。性格はドジで天然、行動は危なっかしく本人の不幸体質もあってリリアに最年長の威厳を見せたくてもなかなかうまくいかない。好きな物はパイ全般、嫌いな物は苦いもの。

アーランド共和国歴代最高で最強と言われたアストリッドを師匠に持ち、その破天荒な行いに常に巻き込まれてきた。アールズ併合の際には若返り薬の実験に巻き込まれ、精神年齢や外見を八才の頃まで退行させられた経験を持つ。メルルの活躍で無事元の姿に戻った後はアーランドに戻り、錬金術の布教や工房の仕事をこなしながら教え子のトトリと共にアーランドの発展に貢献。不定期に訪れるアストリッドの実験に巻き込まれつつも錬金術士として大成し、アーランドではその功績と錬金術の実力から知らぬ人がいないほどの有名人となる。

錬金術士の庭園は元々彼女がアストリッドに連れて行かれた場所です、その後彼女の薦めでトトリとメルルをその住人へ加えた。それからは三人で錬金術の研究をしながら、たまに現れるアストリッドの実験に巻き込まれつつも平穏な日々を過ごす。可愛い子が大好きで、リリアの成長を一番楽しみにしている。彼女の宝物はリリアの成長記録。彼女の可愛い姿を残すためだけに映像媒体を作り出したほどのリリアバカ。

第8話『王国の発展と新メニュー』（後書き）

おまけは思いつきをまとめたものです。新しくこんなを書いてみたいなーって感じで頭に浮かんだものですね。書き始めたら意外と設定考えるの楽しくて時間使ったんですよこれ。

学園物も案にあったのですが、それだとアルケミな作品になってしまうので断念。やっぱりアトリエは工房構えての5年間だよねってことで錬金術の街なんて設定が出てきたわけです。…まあこっちもエウシュリーの某作品に影響されてるんですが。

ちなみにこんなオリジナル続編でも読みたい人いるんですかね？まだ物語の構成なんて欠片もないんですが、予想としては素人錬金術士の工房を凄腕幼女錬金術士が街一番に成長させる物語って感じになると思います。

第9話『廃れた島と豊かなお山』（前書き）

うーん。モチベーションが上がらない…、息抜きに何か書いてみるかなー

第9話『廃れた島と豊かなお山』

錬金術士っ！

第9話『廃れた島と豊かなお山』

———五月三十日

かなりの遠出になっているのか、未だメルちゃんは帰らない。いったい何処まで行ったことやら。正直心配だけど、自分の経験から心当たりもあるし、ひとまず待つことに。

私も冒険者時代に、採取に飛び出して半月くらい戻らないことがあったからね。あの頃は道の先が気になって、好奇心を押さえきれずに予定にはない範囲まで探索の手を伸ばしてたからなー

人一倍行動力のあるメルちゃんのことだから、本当に行けるところまで行っちゃうかもしれない。

護衛とストッパー役もいることだし、深追いは出来ないはずだから心配しなくても大丈夫…、…大丈夫だよね？

ちよっと自信が持てなかった。

数分後、心配しすぎても仕方がないので、気分を変えて自分の仕事をすることに。

手元の依頼品リストを確認して、いつものように調査開始。最近

ではアールズ側で物資の補給体勢が整ってきたのか、最初の頃に比べれば少なくなっていたので昼過ぎにはノルマを達成して自由時間が作れた。

さて、何をするか。研究もいいけど、久しぶりに街を見て回るのもいいかな？

思い立ったら吉日。今日は久しぶりにアールズの街に出てみることにする。

アールズの街は私が最初に来た時より活気に満ちあふれていた。アカデミーが来月から正式に運営されるらしく、それを聞きつけた人達が多く移住したので街の市場も活性化。

今では多くの店が職人通りを中心に出店し、大きな市場を作り出し始めている。

休日にどんなお店があるか見て回るのも楽しくていいだろう。最も錬金術士には休日ってあんまりないんだけどね。皆好き勝手にアトリエに来るものだから決まった休日って取りにくいんだよ…

今度から定休日を作ってみようかと頭の片隅で考えつつ、しばらく街を探索していた私だったけどちょっと気になる人を見つけた。

「あの悲しくなるほどの平原は…」

前方に人混みの海から頭一つ飛び出した無人島が目に入る。あ、あの背丈に特徴的な輝く頭…、もしかして禿げる…、じゃなくって！ハゲルさん！？

まさかこんなところでアーランドの知り合いに会うなんて…、いや、でもだとしたら何時こっちに？それに私に一言くらい言ってくればよかったのに。と言うか本当に本人？

疑問は尽きないけど、とりあえず後を追ってみよう。

それからハゲルさん？の後をつけて十分ほど、目の前には見慣れた剣を打ち合わせたようなマークの看板が。

あ、これ確定だ。やはりハゲルさん？はハゲルさんだったらしい。納得しているとハゲルさんが建物の中に入っていた。

さて、どうするか。久しぶりに会うことだし、やっぱり挨拶はしていこうかな。それにこれからいろいろと武器関連でメルルちゃん共々、お世話になりそうだしね？

頭の中にそう遠くない未来を描いて、私は目の前の扉を開いた。

「すみませーん！誰かいらっしゃいますか？」

「おー、ちょっとわりーが今は準備中だな…、開店は明日からなので明日また出直してくれねーか？」

こちらに背を向けて作業し続けているハゲルさんに相変わらずだなあと思いつつ苦笑する。

でもこのままでは話も聞いてもらえなそうなので、心苦しいけど実力行使させてもらおうとしよう。

「ハゲールハゲールー毛がハゲールー」

「だあああ!! 誰だ! 俺のトラウマを刺激するやつあ!??」

「私ですハゲルさん。トトリです」

「ん? おお! 誰かと思えば嬢ちゃんじゃねーか! 久しぶりだなあ! 元気そうでなによりだぜ!」

「あはは、ハゲルさんもお元気そうで…」

以前お酒の席の暴露大会で本人が語ってくれたトラウマを刺激するような歌相手に、我慢しきれずに振り返ったハゲルさん。私の姿を目にすると顔に浮かべた怒りを潜め、途端に豪快な笑いを見せてくれた。

挨拶を交わした後はお互いの近況を簡単に語り合う。

話を聞くにどうやらハゲルさんがアールズに呼ばれたのは、開拓先での予想以上の魔物の強さに危機感を感じたアールズ王国が腕のある武器屋と冒険者の派遣をアールズ側に依頼したからだそうだ。加えて開拓によって住処を追いやられた魔物がアールズ王国周辺に出現するようになったとの報告も少なからずあり、今後開拓が進んだ際に起こるだろう魔物の被害を解決するための兵士の戦力増強にも期待されているらしい。

「そう言えば今回の人員派遣ってハゲルさんだけなんですか?」

「ん? いや、他にもパメラのやつがいたと思うが」

「パ、パメラさんですか？いろいろな意味で大丈夫なんですかあの人？まともに営業出来ないんじゃない？」

「ああ、そのことだがよ。なんでも、お前さんとこのちびっ子どもの力を借りるだそうだ」

「え、ちびっ子どもってちむちゃん達のことですか？確かにパメラさんのところに預けてきましたけど…、まあ本人達が承諾してればいいんだけど…」

「ああ、詳しい話は直接会って聞きゃいいだろ。ちょっと待ってな…、ほらパメラの店までの地図だ」

「そうですね。ありがとうございます。早速行ってみます」

お礼を言って店を出る。メルルちゃんのことについては軽く話しておいたので、来店したときは気にかけてくれるだろう。

手渡された地図には職人通りの並木通り側の入り口付近に目印が。アトリエに近く住宅街との接点にもなる部分で意外と立地のいい場所だ。

ちむちゃん達のことにも気になるけど、パメラさんのことだから何時眠ってしまうとも限らないし早く行ってみよう。私は急ぐ気持ちを抑えきれず早足気味に目的地へと足を進めたのだった。



「あらートリちゃん。久しぶりー、会いに来てくれたのー？」

「はい。ハゲルさんに聞いて様子を見に来ました。パメラさんが元気そうでしたです。…それで、ちむちゃん達は元気ですか？」

「元気いっぱいよー。皆がいて助かってるわー。私じゃ商品に触れないものー」

「はあ…もう、ちゃんと本人達は承諾してるんですよね？」

「もちろんよー。皆トリちゃんに会いたいつてついでに来ちゃったの。ねー皆ー」

「ちむー！」

「そ、そうだったの皆？寂しい思いさせてごめんね？」

「ちむちむ！ちむー！」

パメラさんが裏で店の開店準備を行っていたちむちゃん達に呼びかけると、奥からぞろぞろと現れそれに同意するちむちゃん達。

本当に私がいなくて寂しかったようだ。皆私に会えたからか、いつもは眠たげな顔に嬉しそうな表情を浮かべている。あーもう可愛いなあ。でも、皆元気そうでした。

実は少し気にかけていたから、こんな形でも会えて良かったな。

「ちむー？」

「ちむー、ちむちむちむー」

「ちむ！」

「ちーむちむ？ちむー」

「ちむ」

ちむちゃん達がせっせと働く様子を見ながら、私はパメラさんと近況を語り合う。どうやらパメラさんは最近の王国市場の拡大に伴い、有用な店舗の獲得のために派遣されてきたらしい。

これは最近移住が増えて様々な店が並ぶ中、それを引っ張っていくような目玉の店が必要とされていたからだった。

ちなみに開店に向けての販売物の確保はアールズ側が受け持ってくれたらしい。あー、なるほど。どうりで最近仕事の依頼に幅が出たのだと思った。中和剤やゼツテルなんて一体何に使うのかと思っていたよ。

こっちでも村にいた時みたいに雑貨屋をやるみたいだけど、今回はなんと国が経営を助けてくれるような契約らしく、販売物の搬入元は王国開拓局の開拓支援部門らしい。

聞いたことないところだけど、要は新地開拓などの開拓関連で手に入れた素材の買い取りを行っている部署だという。

王国が国民に対し自発的に開拓参加を求めている件は知っていたけど、なるほど…、これがある意味での報酬となるわけか。

当然パメラさんのことばかりが話題に上がるわけではなく、もちろん私のことも話題になるわけだけど。

これについては、先生になったことや最近の開拓事情などなど、意外と話す内容にはこと欠けなかった。

そうして話の内容はちむちゃん達についてのことに移る。

「皆への給料はパイで払ってるのよー」

「皆の大好物ですからね。ふふ、なんだかちむちゃんらしいな」

「それでー、トトリちゃんにはパイの調合依頼を頼みたいのよー。もちろん材料費は私が出すわー」

「それはいいんですけど、パメラさんちゃんと店番できるんですか？いつもみたいに寝てばかりはダメですよ？」

「もうー、ひどいなトトリちゃん。最近はこの姿にもなれてきたから平気よー」

そう言っパメラさんは宙に浮きながらその場で一回転してみせる。纏ったドレスがふんわりと広がり、知り合いの中で一番豊かな胸がその重みを感じさせるようにゆっさゆっさと揺れる。

くそっ、幽霊なのに揺れるとか私に対する嫌みか！？私だって揺らしたり谷間を作ったりしてみたいよッ！

だいたい、パメラさんって幽霊なのに妙に質量感があるんだから困る。足はないし本人の口調みたいにもいつもふわふわ飛んでるけど、肌も青白いかじゃなくて色白で通じるくらいの白さだし、透けて向こう側が見えるとかもなく普通にはっきりと見える。

はっきり言おう、幽霊にしては存在感ありすぎである。

そんなパメラさんだけど、見た目は昔風だけど特に古臭さを感じさせないドレスだし、何処かの令嬢みたいな雰囲気纏ってるから村にいた頃は結構人気があった。

それにあの頃は特性の人形に憑依していたから普通に美人のお姉さんだったからな…

それが今の幽霊状態に戻ってしまったのは今より少し前のことが原因。

私がお母さんを探してたどり着いた旅の先でとある塔の扉を開けるために協力してもらったからだ。

いや、あの時は本気で驚いた。分かってはいたけど、実際に目の当たりにすると真面目に死んだかと思ったよ…

結果だけ言うと、その時から人形には憑依出来なくなってしまい、幽霊状態のまま今に至るわけだ。

本人は気づいてないみたいだけど、少し前から徐々にその状態が安定していったのか睡眠時間が減っていた。

幽霊が眠るってのもおかしいけど、パメラさんだから有りなんだろう。なんだか幽霊としての格が上がったのか、本人は気づいてないが無意識に手を使わずに物を動かしてることがある。

俗に言うポルダーガイスト現象だけど、パメラさんは天然気味なところがあるから徐々に強くなっている能力に気づくのはもう少し先になるだろう。

実際さっきも何気なくお菓子を棚から取り出していたのに気づかないし。なぜ気づかないのか本気で謎だ。

いつそ指摘してみるか、いや…、本当は気づいてましたとか言われるかもしれない。

それなんか嫌だなあ…、とりあえず自覚してくれるのを期待して暖かく見守ることにしよう。

あ、今更だけど幽霊が店番してたら、訪ねてきたお客さんは目を回して倒れるんじゃない？

…ま、まあ高く浮かばずカウンター越しになら問題ないかな？
一応、そこら辺のことをパメラさんに話して注意しておく。そうしないと、パメラさんのことだから普通に店の中を浮遊してそうだからね。

帰る前に開店準備を終えたちむちゃん達と久しぶりのスキンシップをとり、その可愛さに癒される。可愛いは正義って本当だよ…

とりあえず、依頼のパイは少し気合いを入れて作ろうと決意する
私だった。

第10話 『調合は計画的に』 (前書き)

ひたすら調合生活なこの話。早くトトリをパーティーに加えてやりたい。

第10話『調合は計画的に』

錬金術士っ！

第10話『調合は計画的に』

———六月三日

メルルちゃんが帰ってきた。けっこう先の方まで行っていたみたいだけど、冒険者の人や王国の開拓員に通行止めをされてきのこの森の外までは進めなかったらしい。

そんな話をしてくれた本人が、なら不満な様子かと言えばそうではなく、むしろ今私の前でカゴ一杯の大小様々なきのこを見つめてにやけているメルルちゃんは、お姫様としてどうなんだその顔と言いたくなるほど幸せで崩壊した顔をしていた。

と、やっぱりお土産はきのこなんだね…

渡されたお土産カゴには八割きのこ、残り二割はハンデルの森で採取したのだろう木材系統の素材が入っていた。

えーと、素材に関してはパメラさん経由で王国開拓局の開拓支援部門と商談が交わせたから、お土産の内容についてはとやかく言わないんだけどね？ やっぱりきのこの自己主張が激しすぎるなーなんて思うわけですよメルルちゃん。

…なぜにきのこだらけになったの？

「？きのこは美味しいですよ？」

いや、確かにアールズ地方のきのこは種類が多くて味も確かだけどね。こんなに採ってきてても、きのこって調合にはあまり使えないよ？どうするつもりなの？

「そりゃあ、食べるに決まってますよ！」

「ええ！？食べるってこの量を…？」

「えへへ、丸焼きとかきのこ鍋とかきのこ汁とか…、うう、想像しただけで涎が…」

「メルルちゃん、ほらこれで拭いて」

「あ、ありがとうございます…」

「あはは、でも本当にきのこが好きなんだね」

「当然ですっ！きのこはアールズの数少ない特産品、みんな大好きなのは当たり前です！」

「あ、当たり前なんだ…」

不味いな、放っておいたらまたきのこ談義を始めそうな雰囲気だな、何か気を逸らすものは…

目についたのはお土産カゴ。やはりきのこで一杯なのだが、これを見て思った、せっかくだから何か作りたいなど。

なんだか最近料理に手間暇をかけてばかりだったから、料理人としての血が呼び覚まされたみたいなんだよ。錬金術もいいけど、料理は手作りが一番美味しいからね。

メルルちゃんの話が本格的に始まる前に言わないと調理する時間がなさそうなので、メルルちゃんには悪いけど話しの腰を折らせてもらうよ？

「それですね、ロイヤルクラウンってきのこが…」

「メルルちゃんっ！」

「うひゃ！な、なんですかトトリ先生？」

「私自作のきのこ料理、食べたくない？」

「先生の自作！？た、食べてみたいです！すっごく！」

「うん、なら今から作るから、出来るまでメルルちゃんはコンテナの整理。素材や調合品もいろいろと集まってきたんだし、そろそろ一度中を整理しとかなないとダメ。わかった？それが終わるくらいには料理も出来てるはずだから」

「はい！頑張って整理してきます！」

えへへ、どんな料理だろ？そんな期待に満ちた言葉を残しながらメルルちゃんはコンテナの整理に向かった。

私はそんな彼女の期待に応えるべく必要な材料をチェックする。

今回私が作ろうとしているのは炊き込みご飯だ。炊き込みご飯って実はこっちでは存在しないだね。アーランドは西洋な文化に近いせいか、基本的にパンが主食だから。

私がお米の存在を知ったのはアーランドの街に出てきてからだっ
たな…、ないと思っていたらイクセルさんの食堂のメニューに普通に載ってて、当時は懐かしさに動かされるまま注文したっけ。もちろん、その時から私は食堂の常連。

それからイクセルさんと錬金術で作った料理で料理対決したり前世の知識にある料理を再現したりして、気づけば一般的に言うところの師弟関係になってたな…

と懐かしい回想を終えて、時間が惜しいのでさっそく調理を開始。

日が暮れるくらいには調理は終了し、完成したきのこの炊き込みご飯とおかずについたきのこの野菜炒めを二人で美味しく食べた。

ちなみにメルルちゃんがおかわりを沢山してくれたので残り物は出なかった。

――六月十日

ここ数日は開拓支援の依頼も来ずにメルルちゃん的生活は調合がメインになっていた。

「……よし、できた！」

メルルちゃんは今までなかなか安定した調合が出来なかったインゴットやクロークなんかを完璧にマスターした。

そろそろ新しいレシピを渡しても平気かな？最初の頃に比べ調合時の姿がだいぶ様になってきたのを見てそう考える。

「あ、そう言えばトトリ先生。ハゲルさんって知ってますよね？」

「うん、知ってるよ。ハゲルさんがどうかしたの？」

「えっと、この前街を歩いてる時に知らないお店だと思って入ったんですけど、トトリ先生と知り合いだって言っていたから少し気になって…」

「そうなんだ。あのね、ハゲルさんはインゴットやクローク類から

武器や旅の衣服を作ってくれる鍛冶士なんだ。だから私も昔からよくお世話になってたの、だからメルルちゃんのこと話しておいたんだよ」

どうやらメルルちゃんはこの前のお休みでハゲルさんの店を見つけたらしい。

最近あんまり煮詰めるのも問題だからと、国の現状を知ることと気分転換を兼ねた休みを取ることにしたのだ。

せっかくなのでメルルちゃんに鍛冶屋の仕事とその重要性を話しておく。

この先錬金術士として大成するのにも戦闘能力は必要不可欠、錬金術を活用した装備を揃えるのは錬金術士として当たり前のことだからね。

ここで注目すべきはハゲルさんの鍛冶の腕前。あの人は先祖代々鍛冶職人の家庭で、その知識や先祖直伝のレシピは尊敬に値するものだ。

現在確認されているインゴットやクローク類なら、全てをそれに適した形にしてくれる。

恐らく新しく確認されたものでも、その知識と腕前から最適なものへと生まれ変わらしてくれるだろう。

そこまでの男なのだ、ハゲルと言う男は。ただ、まあ名前に関し

てセンスが欠片もないのが唯一の欠点か。

作業を中断して私の話を聞いていたメルルちゃんはハゲルさんと鍛冶職人に興味を持ったようだ。

なので、実際に詳しい話を聞きに行っても損はないとの私の言葉に、なるほど明日の予定が出来たと頷いていた。

———六月十二日

「こんな感じで…、よし、いい感じ…」

メルルちゃんは今、ハゲルさんの依頼で高品質なインゴットの調合に挑戦している。

依頼のインゴットの用途は鍛冶用の溶鉱炉を作るためなので手を抜くわけにもいかず、納得いく品度が出ずに昨日から何回も調合を繰り返しているのだ。

メルルちゃんの場合はそれが経験値として反映されるのが早く、既に私でも納得出来るものを作り出そうとしている。

もっとも、材料の品質自体が最高級といったわけではないので、ある程度の品質までしか出来ない。

それを解決するには高品質にする特性を持った素材を使えばいいのだけど、生憎手元にその手の特性を持った素材がないので今言っても意味ないんだけどね。

調合が一段落ついたらその辺りの話もしてみようかな。依頼の類には品質が求められることなん普通だから。

それに、特性を有効活用したほうが依頼の品は作りやすいしね。

私は調合の最終段階に入って気合いを入れているメルルちゃんを見ながら、久々の錬金術講座で話す内容を頭に思い浮かべた。

———六月十四日

ハゲルさんの依頼を通してより一層の実力を身につけたメルルちゃんに新しいレシピを教えることにした。

今回教えるのはドナーストーン、祝砲、ネクトル、紅の塗料、薬のもと、ガラス玉、ぶどう水、ドライフラワー、乾いたにくのレシピだ。

この中で是非とも修得して欲しいのは祝砲とネクトルだ。

祝砲は名前通りに祝いの場などで使われるような小さな大砲だが、

携帯性と扱いやすさが売りで、なおかつ錬金術で作られているために弾の装填から照準合わせや発射に至るまで全てが自動化されている。

もちろん、使用者の意志で細かい操作も可能と言った優れたもの。基本的に距離がある時などに力を発揮してくれる。

次に上げるのがネクタル。ネクタルは失った生命力を回復させる薬で、戦闘によって受けた致命傷を回復させることが出来る。

さすがに死亡したものを生き返らせることや、体の欠損をどうにかすることは無理だけど、それ以外なら大抵の場合なんとかなるアイテムだ。

何があるか分からない未知の土地の探索には出来る限り持って行きたい。

と、渡したレシピを簡単に説明して、まずは祝砲から調合することを勧めしてみた。

なぜかと言えば、最近インゴットばかり調合していたのでコンテナに大量に入っているからだ。

品質を気にして作っていたからか、それを使って調合した祝砲はそれなりに品質が高くなり、それだけ誤動作も少なくなる。

戦闘中に弾詰まりなんてしたら目も当てられないからね。きちんと一定の品質は保ちたい。

メルルちゃんは私の話を聞いた後、さっそく祝砲の調合を始める。

戦闘アイテムも本当は特性などを考慮した素材作りから始まるのだけど、それはまだちょっと先のことになるかな。メルルちゃんの後ろ姿を眺めながらそんなことを考えた。

「さてと、私も依頼の品を調合しないと…」

———六月十六日

「トトリ先生、中和剤ってまだありますか？」

「中和剤？ちょっと待ってね。…はい、メルルちゃん」

「ありがとうございます。それにしても、うーん、最近中和剤の減りが早いような…？」

「ふふ、中和剤は意外とよく使うから消費が激しいアイテムだよ？だから、補充はこまめにしとかなないと、今みたいにいざという時に困っちゃうからね？」

「う、はい、次から気をつけます…」

中和剤は初級の調合品だからか、最初は皆経験値稼ぎのために大

量に調合するんだけど、調合になれてくると新しいレシピばかり目
がいくようになるから新しく作るなんてしなくなるんだよね。

でも実はこれって間違い、錬金術における中和剤の役割は比較的
に多くあるのだ。

中和剤は異なる素材を混ぜ合わせるには欠かせない緩衝材みたい
なもので、錬金術ではその特性を利用して多くの調合に使われる。

実は日常的に受ける依頼の品では中和剤が比較的に多い。それだ
け用途があるわけですよ。

なので私のコンテナには常にある程度の数をストックされている。
調合にも使うしね。

この類のことは実際に体験して覚えていかないといけないから今
回は特別に中和剤を分けてあげたけど、次からは今回みたいな融通
はないからねメルルちゃん？

「はい、気をつけます…」

「よろしい」

少し気を落としたようだったメルルちゃんだけど、調合を始める
といつももの彼女に戻るので心配ない。前向きな性格が長所な彼女だ
った。

第11話 『ハルバートとメイド少女』 (前書き)

今回はいつもより短いです。

第11話『ハルバートとメイド少女』

錬金術士っ！

第11話『ハルバートとメイド少女』

———六月十七日

今日は昼頃にケイナちゃんがやってきた。メルルちゃんがアトリエで生活するようになってから定期的に衣服の洗濯や食事の差し入れをしてくれていたから、それほど珍しいことではないのだけど、今回は私にちょっとした相談があるとのこと。

テーブルを引っ張り出してその上に私特製のモンブランを並べ、レシピ本片手に練金釜をせっせとかき混ぜるメルルちゃんを横目に私とケイナちゃんは向かい合う。

「メルルちゃんなら、たぶん後少しで一息できると思うから先に話を聞かせてもらっていい？」

「はい、実は…」

ケイナちゃんの相談は最近活動範囲が広がってきたメルルちゃん

の冒険で、自分だけが戦闘でいつも足を引っ張っているのを気にしているのだった。

つまり、ある程度の戦闘手段が欲しいのだけど、武術に秀でていない自分ではいい案が思い浮かず、アイディアの塊と言われる錬金術士である私に相談しに来たらしい。

ん、なるほどね。確かに錬金術士としての視点から見れば常人じや思い浮かばないような案も浮かぶだろう。彼女がわざわざ私に相談しに来たのはそのためか。

真剣な目でこちらを見つめてくるケイナちゃんを眺めて考える。さて、どうしたものか。現在のケイナちゃんの武器は以前渡した睡眠薬の投擲、後は身を守る程度の護身術。戦闘のスタンスは後方で相手側に薬瓶の投擲を行いつつ、メルルちゃんの戦闘アシスト。

回復手に回るにしても戦闘中に意識を反らせるほど上手くは立ち回れないし、攻撃に専念するにしてもはつきり言って火力不足、今の戦い方ではこの先有効打撃など与えられないだろう。

つまり、どう足掻こうとも現状では彼女の取れる手段は補助の域を出ないのだ。本人としてもそれはもちろん分かっているはず。それに納得出来ない彼女が目の前にいると。

さて困った。完全に補助タイプの彼女に戦闘力を持たせる方法か……問題は今のスタンスで行くか、新しい武器を手取るかなんだけど……

「ケイナちゃんはどうしたいの？」

「私は…出来ればメルルの側で戦いたいです」

「…なるほどね。それってやっぱりメルルちゃんが危なっかしいから？」

「それもありますが、きっとメルルは放っておいたらどこまでも行っちゃいますから。誰かが側で支えないと」

「確かに…あの好奇心と行動力なら十分ありえる。うん、さすがメルルちゃんのメイドさん、主人のことは全部分かってるんだ」

「ふふ、違いますよトリ様」

「？」

「私がメルルの親友だからですよ」

彼女の選択は武器を持つこと、自分の親友と共に最後まで歩むことを選んだ。なら、私は彼女を全力でサポートしないとね。

武器はいつだか作った喋るハルバートがあっただけだから、それを渡せば問題ないはず。あれにはメル姉の経験が蓄積されてるし、人格も穏やかだから素人相手でも戦い方を教えてくれるだろう。

しばらくは彼女に戦い方を学びながら戦闘を行うといい。彼女自身もサポートに回ってくれるだろうから、素人でも何とかやってくれる。後は慣れるまでの保険として、今までより強力な睡眠薬の入った瓶を渡しておく。

「トトリ様、ありがとうございます」

「あはは、気にしないで。ケイナちゃんにはいろいろとお世話になったからね。そのお返しだよ」

「うわあ、凄い！喋る斧だ！」

「あのメルル様、私は斧ではなくてハルバートなのですが…」

「いったいどんなレシピなのかな？うわ！意外と軽いし振りやすい！凄いなあ、私も早くこんなやつ作ってみたいなー」

「ちょ！？そんなこと言いながら振り回さないでくださいいい！！！」

「メルル！こんなところで振り回しては危ないでしょ！？」

「あはは…、頑張ってハル」

前途多難なハルバートのハルだった。

———六月二十日

最近王国市場で流通の効率化がなされたい。着々と増える人口に伴って多くの店舗が出店し始めたので、それをまとめ上げて管理することで商品や材料の輸送に滞りを無くすることが目的らしい。それにより、王国市場はまだまだ発展が見込めるとのこと。

これに平行して街の防衛や開拓地に派遣される兵士の練度を上げることを目的とした訓練所が作られた。今までまともな訓練所がなく、兵士たちからも要望が出されていただけに、彼らから見れば待ちに待った施設。日々汗水垂らしながら熱心に訓練に打ち込んでいく。その姿がまた国民に高評価らしく、街のあちこちで兵士に向けての応援の声が飛ばされていた。

そんな街の一角、パメラさんの店に今日はお邪魔している。

「この国も、だいぶ賑やかになりましたね」

「そうねー、私も毎日お客さんが来てくれて嬉しいわー。でも、皆決まってすぐに帰るから困るのよねー」

「パメラさん…、まさかさっきみたいに出迎えたりしてないですよね？」

私が店に入った時、店の店主であるパメラさんは当たり前のように店内を浮遊していた。それだけでアウトである。お客の行動は普通にお化けを目撃した反応だ。叫ばれないだけましか。

「えーそんなことないわよー」

「いや、アーランドでもあったでしょ？」

「そーだったかしら？」

パメラさんが今の幽霊状態になった後、彼女は店をアーランドの街に移したのだけど、開店一月もたたずにお化けの住む店とか噂されて大変だった。

度胸が据わった人物か物好きな冒険者くらいしか店を訪れないので、私が街の皆にパメラさんを紹介して回ってどうにか理解を得たのだ。そのおかげか、今ではそのほんわかした雰囲気もあって街の人気者となるくらいに親しまれている。

それをここでもやらないといけないのか！？学習してくださいよパメラさん！

「でも、メルルちゃんは気にしてないみたいだったからー」

「それだ！」

この件についてはメルルちゃんの力を借りよう。街の住民に対して顔が効くし、移住してきた人たちも彼女の性格なら印象がいいはずだからね。

後日、話を聞いたメルルちゃんはこの話を快く受けてくれた。近い内に実行に移すことになるだろう。

でも、今はモヨリの森からの依頼があるから、そっちを優先かな。

――六月二十一日

モヨリの森からの依頼は最近になって異常繁殖したにんじんの対処に困っていると言った内容だ。

大した特産物のないモヨリの森から見れば、異常繁殖したにんじんは新たな特産物として考えることも出来る。今回の話し、あまり悪くない話しに聞こえるが、実はこれに付随した大きな問題があるのだ。

それはにんじんを好物とするカロットうさぎの大量発生と、それを餌とするウォルフの群が現れるかもしれないという懸念。大量のにんじんが定期的に手に入っても、さすがにそれではマイナス部分が大きすぎる。

今回の依頼はそれを見越した兵士長が出したものらしい。ほんとに、モヨリの森の兵士は無駄に優秀な人達がいるから困る。

アールズはその昔、開拓して土地を広げていた時期があった。その時の資料に雑草殺しの霊薬が記載されていたので今回はそれを調合することに。

「それにしても、にんじんだらけの森かあ…、やっぱりそこら中ににんじんが生えてるのかな？」

「どうだろう…、やっぱり何カ所かに固まってるんじゃないかな？」

「うわ、ちょっと見てみたいかも…」

午後、出来た霊薬を持ってメルルちゃん達はワクワクしながら出かけていった。

ああ、きつと帰ってきた時には、鞆の中にはにんじんで一杯なんだろうな…

———六月二十六日

メルルちゃんは予想通りににんじんだらけの鞆で帰って来た。前にも同じ事があったが、別に鞆を埋めなくてはならないわけではないんだよ？

「えへへ、つい」

「まあ、分からないわけでもないんだけどね…」

私も最初は持って帰れるだけ持って帰ろうとしてたしね。でも後々コンテナが一杯になって処理するのが大変だったんだよ： 食材は長期の保存できないし、鉱石の場合は下手に市場に流すわけにもいけない物が混じってたからね。そもそもコンテナの整理自体が凄く時間がかかった。

だから、メルルちゃんには定期的にコンテナの整理を行うことを義務にしている。まだまだコンテナに余裕がある現状では“貰える物は全部貰っとく”の精神が抑えきれないみたいだけど。やっぱり一度経験してみないとダメかなあ

結局今後使う分には十分な量をコンテナにしまって、残りは下通りに店を構えているフアナさんに引き取ってもらう事になった。こちらとしては処理に困った物を押しつけたような感覚だったが、フアナさん本人としては無料で商品が手に入ったと認識したらしく、今後処理に困れば持つてくるようにと真面目な顔で約束させられた。

「あ、そうそう明日の午後酒場に行ってみなよ。面白い物があるはずだから」

「面白い物？何なんですか？」

「それは明日のお楽しみってね」

それだけ言うとすぐに在庫整理に取り掛かるフアナさんに、メルちゃんと顔を見合わせて首を傾げて尋ね返しても、意味深な微笑みを浮かべて教えてくれないので後を引かれながらも店を後にする。

いったい何だろう？明日が楽しみだ。

その後、メルルちゃんがルーフェスさんに今回の依頼の結果を報告するために城へ向かうのを見送り、せっかくだからと夕食の買い物をしている時に、偶然買い物籠を手にしたケイナちゃんに出会った。

「あ、トトリ様」

「こんにちはケイナちゃん。買い出し？」

「はい、今日は私の当番なんです」

「そうなんだ。ならお勧めなお店ってないかな？知らないお店が増えたから困っちゃって…」

「確かに最近増えましたからね…、私の行き付けのお店でいいなら紹介しましょうか？」

「本当？助かるよ」

「いえ、ハルのお礼もしたかったですし」

「ハルのこと気にいってくれたみたいだね」

「はい、私には勿体ないくらいいい子です。この前も戦闘で助けられました」

「そっか、上手くやっているようで安心したかな」

遠くない未来、アールズ王国には戦うメイドがいると噂されるようになるとは、この時の私と彼女では思いもしなかった。ちなみに蓄積された経験の元がメル姉だったので、ハルの育て方が完全にパワータイプを目指したものだっただけの言うまでもない。

第11話 『ハルバートとメイド少女』 (後書き)

家のケイナは戦うメイド (格闘) を目指します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2257v/>

錬金術士っ！

2011年10月6日20時24分発行